

琉球大学学術リポジトリ

教材研究（芥川龍之介）

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2008-11-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小澤, 保博, Ozawa, Yasuhiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/7807

教材研究（芥川龍之介）

小澤保博*

The Study Teaching Materials on R.Akutagawa's Work

Yasuhiro OZAWA

I 「鼻」

はしがき

「鼻」（「新思潮」大正五年二月）を漱石から賞賛される事で芥川龍之介が、短いが栄光に満ちた文学的出発を遂げた事は、既に文学史的伝説と化している。後年、龍門の四天王の一人佐佐木茂作は、吉田精一に芥川龍之介が漱石の全てを理解した真の後継者は自分であるという認識を抱いていたという彼の思い出を語った。

拝啓新思潮のあなたのものと久米君のものと成瀬君のもの読んで見ましたあなたのものは大變面白いと思ひます落着があつて巫山戯てゐなくつて自然其儘の可笑味がおつとり出てゐる所に上品な趣があります夫から材料が非常に新らしいのが眼につきまます文章が要領を得て能く整つてゐます敬服しました。あゝいふものを是から二三十並べて御覧なさい文壇で類のない作家になれます然し「鼻」丈では多数の人の眼に触れないでせう触れてもみんなが黙過するでせうそんな事に頓着しないでずんずん御進みなさい群衆は眼中に置かない方が身體の薬です（「芥川龍之介宛書簡」大正五年二月十九日）
この漱石の賞賛が効を奏して漱石山房の古

参の弟子である鈴木三重吉が、編集に関係していた商業雑誌に「芋粥」（「新小説」大正五年九月）を掲載する道が開けて、さらに漱石の木曜会出入りの滝田樗蔭の世話で文壇の登竜門に「手巾」（「中央公論」大正五年十月）を執筆し、芥川龍之介の文壇登場がなされたのである。

これ以前に「鼻」と同じく「今昔物語」を典拠とする「羅生門」（「帝国文学」大正四年十一月）を発表している。この作品掲載に労を取ってくれたのは、当時「帝国文学」編集を任されていた青木健作である。この事実上の処女作掲載に関しての恩人に報いるために後年、芥川龍之介は「放屁」（「時事新報」大正十二年六月）と「文芸的な、余りに文芸的な」（「十一 半ば忘れられた作家たち」）で青木健作の作品を推奨した。俳句に造詣のある青木健作に芭蕉の関する文献知識を得るために小石川大塚坂下町に何度か、訪問を繰り返した芥川龍之介の思い出を息子の井本農一が書き残している。

青木健作と夏目漱石の二人が、「羅生門」と「鼻」の二作に拠り新人芥川龍之介を文壇に送り出した恩人である。そしてこの二作は、共に推敲の痕跡の著しいものがあって芥川龍之介の文壇登場が、偶然や機倖によって成さ

*琉球大学教育学部

れたものでない事を窺わせる。それ以前の創作作品は、「大川の水」（「心の花」大正三年四月）、「老年」（「新思潮」大正三年五月）、「青年と死と」（「新思潮」大正三年九月）、「ひよつこ」（「帝国文学」大正四年四月）、「松江印象記」（「松陽新報」大正四年八月）等数編を数える。

そしてこの時期までの芥川龍之介を知る上で特筆すべきは、数編の翻訳小説を残している事である。「バルタザアル」（「新思潮」大正三年二月）、「春の心臓」（「新思潮」大正三年六月）そして「シング紹介」（「新思潮」大正三年八月）である。愛蘭文学と言え、松村みね子である。笠井秋生「鼻」には、松村みね子訳「聖者の泉」（「新潮社」大正十二年七月）の要約が掲載されている。「聖者の泉」を「鼻」の典拠と考える事は無論出来ないが、創作「鼻」の主題に示唆を与えた可能性はある。

アイルランドの東部のさびしい村に住む盲目の乞食夫婦は共にやつれ汚れた醜い男女である。だが、村人たちの悪意に満ちた虚言によって、二人は自分たちを美男美女だと信じこんでいた。或る日、村にやって来た聖者の霊水により視力を回復するが、醜い容貌に驚いた二人は、互いに罵り憎み合うとともに、村人たちの悪意に深く傷つく。しばらくして、二人が再び盲目となったので、村人に依頼された聖者が再度の奇蹟（終生の開眼）を行おうとする。しかし、醜悪な現実で失望した夫は、それを厳しく拒否し、村人たちを罵倒しつつ、妻と共に村を去り、南の土地に向かって旅立って行く。（笠井秋生「鼻」－漱石書簡の意味）

「鼻」の主題を愛蘭の劇作家シング「聖者の泉」に拠るとする説は、早くに芥川龍之介在世中にすでに既に指摘されていて、繰り返して考証が行われてきた。芥川龍之介がシング「聖者の泉」を読んでいた事は確実である。それには、理由があって菊池寛、芥川龍之介が英文学を学んでいた時期は、アイルランド文学の隆盛期で彼らは多くの作品をその影

響下に書き続けたからである。芥川龍之介の作家前史年表を見ると、「椒図志異」などのノート類と並んで愛蘭文学の翻訳類が目につく。『ケルトの薄明』より（「新思潮」大正三年四月）、「シング紹介」（「新思潮」大正三年八月）等の外国文学の紹介が目につく、菊池寛、芥川龍之介の著作目録を今日一覽すると彼等が英吉利文学を専門とした外国語畑の人間であることを再認識する事になる。外国語を専門にした菊池寛が、歌舞伎、浄瑠璃等の古典芸能に対して一方ならぬ造詣があった事は、今日の視点から見ればそれ自身が、特異な事であったのだ。言うまでもなく、芥川龍之介が南画、篆刻等の技術を有して、漢詩、俳句は言うまでもなく日本、中国の古典に造詣が深かったのは、当時においても特異な事例であったのだ。

そして片山広子（筆名松村みね子）との関係である。松村みね子訳「シング秘曲全集」（「新潮社」大正十二年七月）は、芥川龍之介在世中のことである。佐佐木信綱門下で作歌としての最初の成果が、歌集「かわせみ翡翠」であるが、芥川龍之介「翡翠」（「新思潮」大正五年六月）は、その紹介記事で以後、二人の間には最晩年まで書簡の往復があった事は、そして密度の高い恋愛感情があった事は、その感情は一方向的に女性の方が積極的であった事は、吉田精一、堀辰雄等の考証でよく知られている。

芥川龍之介「翡翠」には、本文中最初に二つの歌が取り上げられている。「曼珠沙華肩にかつぎて白狐たち黄なる夕日にさざめきをどる」「何となく眺むる春の生垣を鳥とび立ちぬ野に飛びにけり」、前者の明星派を思わせる歌を片山広子の過去の歌歴として、後者の万葉調に今後の活躍を見たいと論評している。この短評を書いた時の芥川龍之介の希望は、様々な形で達成されたと考えてよい。『越びと』（「旋頭歌」二十五首）や堀辰雄『物語の女』（『楡の家』一部）は、具体的結果である。

シング「聖者の泉」の主題は「鼻」造型に

どのような形で関与したか。宮島新三郎「大正文学十四講」（「新詩壇社」大正十五年六月）は、「鼻」と「聖者の泉」を比較検討して次のような見解を示した。

アイルランドの劇作家シングの作に『聖者の井戸』といふのがある。夫婦の乞食が毎日々々お貰ひをして暮してゐる。二人共盲目である。世間の人の話によると、男は美男、女は美女である。そこで、亭主はどうかして自分の女房の顔を一眼なりと見たいと思ふ。女房も同じく亭主の惚々するやうな顔に接したいと思ふ。そして神に祈りをしてゐると、その効があらはれて、二人共眼があいた。亭主の眼に映つた女房の顔は、思つてゐた美人の容貌ではなく、皺だらけの顔であり、女房の眼に映つた亭主もこれまた美男どころか、あばたの老顔であつた。二人はそこで矢張り元の盲目がよかつたと嘆ずる。（「芥川龍之介氏の芸術」）
「聖者の泉」の梗概に続いて、宮島新三郎は両作品を比較して次のような見解を述べた。「望んでゐたものを得た後の不満のあらはした点に、一味の共通がある。これは理想は理想である間が尊いといふ哲学にもなる。かう見て来ると、『鼻』は一つのイデーを表はした作品になる。」、この見解が妥当であるかどうか以下、考察を進める。

最初に考えなくてはならないのは、「鼻」創作時の芥川龍之介の脳裏に「聖者の泉」の作品構想、主題についての思いが念頭にあつたか、どうかという課題である。結論を先に提出しておくとは肯定的に断定せざるを得ないと思う。シングの「聖者の泉」（原題「The well of the Saints」）はその翻案小説が、坪内逍遙「靈驗」（「金港堂」大正四年二月）というタイトルで「鼻」執筆一年前に出版されているからである。

何故この時期に坪内逍遙が、愛蘭文学、とりわけシング「聖者の泉」の翻案小説を出版したのか、おそらくは松村みね子等の愛蘭文学へののめり込みが流行となつて、この稀代のシエクスピア学者の琴線に触れたのであろう。若い世代、菊池寛、芥川龍之介等の愛蘭

文学への熱中は当時の文学的な流行に被れた結果である。

「靈驗」出版直後に坪内逍遙は、長年の早稲田大学の教職を辞した。以後、坪内逍遙は文筆業に邁進するが、時期を同じくして坪内逍遙創設の早稲田文学科は、自然主義文学とその延長線上にある社会主義文学の牙城と化した。先に引用の芥川龍之介宛、漱石書簡の一節が思い出される。「群衆は眼中に置かない方が身體の薬です」は、「鼻」の主題に関する事で、自己の存在が周囲にどう見られているか気にする主人公の進退に関して作者の処世観に注意を喚起したものであろう。その後の芥川龍之介の人生を考えると恩師のこの言葉は、届かなかつたようだ。「公論は敵讐より出に如かず」で、東京帝国大学に拠る「帝国文学」（「羅生門」）「新思潮」（「鼻」）で文壇に登場した芥川龍之介は、終生敵側の早稲田派の動向を気にしていた。「一塊の土」に寄せた正宗白鳥の賞賛（「郷里にて」大正十三年二月）に狂喜した芥川龍之介の姿が、記憶されている。

以上の諸事情から考察するについて芥川龍之介は、シング「聖者の泉」を翻案した坪内逍遙「靈驗」を読んでいたであろう。むしろ、自らの基督傳「西方の人」に収斂されていく芥川龍之介の宗教的傾向を考えると、歴史に典拠を借りながら信仰の問題を主題に据えた「靈驗」以後の坪内逍遙の作品「役の行者」（「新演芸」大正五年九月）、さらにはこれらの作品で取り扱った信仰の問題を集大成した感のある「法難」（「大観」大正九年一月）等の作品は、彼の歴史小説に甚大な影響を与えているような気がする。この時期に芥川龍之介が、「鼻」「芋粥」を書いた理由を今日の視点から忖度すると「理想は理想である間が尊いという哲学」（「大正文学十四講」宮島新三郎）という作品の主題説明が、思い出される。「鼻」「芋粥」の創作行為には、従来指摘されてきて定説となつた吉田弥生との恋愛問題が、創作行為の源泉として一番妥当な見解のような気がする。

それからこの自分の頭の象徴のやうな書齋で、当時書いた小説は、「羅生門」と「鼻」との二つだつた。自分は半年ばかり前から悪くこたはつた恋愛問題の影響で、独りになると気が沈んだから、その反対になる可く現状と懸け離れた、なる可く愉快な小説が書きたかつた。（「あの頃の自分の事・別稿」大正八年一月）

この「鼻」創作動機の説明文の後には、当時の「鼻」執筆直後の芥川龍之介の偽りの無い心情が率直に記述されている。「自分はひどい気疲れと一しよに、何とも云へないはかない心もちがした。愉快なる可き小説が、一向愉快とも何とも思はれなかつた。」という述懐が続くのである。「鼻」「芋粥」創作動機の解明は、作者の深層心理の解明に直接結び付く行為である。過去の吉田弥生との結婚問題とその破局の後の心情、愛の揺曳に苦しんだ若い芥川龍之介の複雑な精神の陰影を感じさせている。

一月二十六日。今までぼくは彼等の愛の中に生きた。これからは彼等を僕の愛の中に生かしてやる。たとへその境に彼等がぼくをにくみ、僕が彼等をにくむ事があらうとも。（「手帳」一）

何気なく記述したこの時の芥川龍之介の心情が、「鼻」「芋粥」に仮託した芥川龍之介の創作行為の深層心理に結び付いているであろう。後に問題視する事になる典拠「靈驗」に関係してのことであるが、「○義経記。承久記。北条九代記」（「手帳」一）という覚え書周辺には、坪内逍遙「靈驗」の理解に関して逍遙鎌倉罪惡史三部作「牧の方」（「早稲田文学」明治二十九年一月～明治三十年三月）「名残の星月夜」（「中央公論」大正六年六月）「義時の最期」（「中央公論」大正七年六月）等の読了の痕跡を証明する二、三の覚え書が散在する。ここで再度「芋粥」の主題に関係して吉田精一の見解が注目される。

人生に於ける理想なり欲望なりは、達せられない内に価値があるので、それが達せられた時には、理想が理想でなくなつてし

まい、却って幻滅を感じるばかりだという、人生批評を寓したのである。（「芥川龍之介 I」十一）

以上のような種々の要因を考察していくと「鼻」創作に込めた芥川龍之介の創作当時の心情が透けて見えてくる。自己の心情の奥底にくすんでいる喪失した愛の揺曳を、達せられる事の無かった理想に仮託して描いて見せたのである。描ききった時に著者は、果たして心情の処理に成功したのであろうか。「何とも云へないはかない心もちがした。」と言っているのであるから目論見は、不成功に終わったのである。「鼻」の主人公は、理想が達せられる事で人生の目的そのものを喪失して落胆したが、著者の方では心情は、そのままであった。失われた愛の痕跡は、さらに大きくなり芥川龍之介は、失われた愛の痕跡、記憶の揺曳にさらなる苦痛を覚えた事になる。

ここで自然主義文学に対して徹底的に冷笑的な態度を生涯崩さなかつた芥川龍之介の創作手法について確認しておきたい。後年、彼は告白について次のような見解を示した。

完全に自己を告白することは何人にも出来ることではない。同時に又自己を告白せずには如何なる表現も出来るものではない。（「侏儒の言葉」告白）

後年の彼自身の言葉に拠れば、「鼻」「芋粥」も共に「隠約の間」（「侏儒の言葉」）に彼自身の心情を隠密裏に語ったものである。創作手法としては、自らの性に纏わる出来事での墮落の過程を半世紀以前の彫り物しの人生に仮託した谷崎潤一郎「刺青」の創作手法に学んだのである。

吉田精一「芥川龍之介 II」には、後年の久米正雄の「鼻」についての感想の断片が引用されている。『鼻』くらいははっきりしている作品は無い。読んで誰にも分る作品は『鼻』です。芥川は表現しようと思う最後のものまであれで表現しています。（「微苦笑隨筆」）、この久米正雄の批評について「さすがによく見ていると思う」と吉田精一は、評価した。同趣旨の発言を松本清張もしていたが、純然

たる処女作を代表作と評価され続けている事は、芥川龍之介にとって幸福な事ではない。芥川龍之介は、「MENSURA ZOILI」（「新思潮」大正六年一月）で文学作品判定器械なる装置を登場させる事で、坪内逍遙退職後に自然主義文学、社会主義文学の牙城となった「早稲田文学」を槍玉に挙げている。

「しかし、その測定器の評価が、確だと云ふ事は、どうして、決めるのです。」

「それは、傑作をのせて見れば、わかります。モオパッサンの『女の一生』でも載せて見れば、すぐ針が最高価値を指しますからな。」（「MENSURA ZOILI」）

これは、当時早稲田系の代表的な同時代作家、広津和郎「女の一生」（「植竹書院」大正二年十月）に対する芥川龍之介の皮肉である。志賀直哉「杵掛にて」（「中央公論」昭和二年九月）で回想されている芥川龍之介の発言で「煮豆ばかり食つて居やがつて」と嘲笑されている早稲田派の作家というのは、言うまでも無く広津和郎の事である。こうした周辺のやり取りの中から宇野浩二「龍介の天上」（「解放」）が、書かれた。この作品は「鼻」で華々しく文壇登場をなした芥川龍之介を揶揄したもので典拠は、宇野浩二自身が言うように口碑、伝説の類である。

1 典拠「今昔物語」（「池尾禅珍内供鼻語第二十」）

「鼻」創作に賭けた芥川龍之介の意気込みは、典拠「今昔物語卷二十八」（第二十）を粗筋としてなぞっているが、典拠を大幅に離脱しているところに作品創作に込めた主題がある。これについて明確に指摘したのは、宇野浩二「芥川龍之介」でもある。

『鼻』と『芋粥』のテエマは、両方とも、理想（あるひは空想）は理想（あるひは空想）であるうちが花といふ程の意味である。とすると、芥川や（殊に）菊池が愛読した、アイルランドの劇作家シングの『聖者の泉』（“The Well of the Saints” - 『靈験』といふ題で翻案された）とまつたく同じ趣

向である。（「芥川龍之介」四）

芥川龍之介没後、二十五年後に亡友との交友を記述する宇野浩二の脳裏には、「鼻」とそれを揶揄した自作の童話「龍介の天上」、さらには遠い早稲田の英文科学生の時の恩師、坪内逍遙翻案「靈験」の三作が脳裏にあった事になる。理想が理想である間が、花という主題は、先に述べた如くに愛の喪失の痛手を芥川龍之介が、深層内部で整理するために、その主題に即した説話を「今昔物語」の中から自ら取捨選択した事になる。

然テ、此ノ内供ハ、鼻ノ長カリケル、五六寸許也ケレバ、頷ヨリモ下テナム見エケリ。色ハ赤ク紫色ニシテ、大柑子ノ皮ノ様ニシテ、ツブ立テ膨レタリケル。（中略）鼻糸小サク萎ミ縮テ、例ノ人小キ鼻ニ成ヌ、亦二三日ニ成ヌレバ、痒リテ膨レ延テ、本ノ如ク二腫テ、大キニ成ヌ。（「池尾禅珍内供鼻語第二十」）

禅智内供の鼻と云へば、池の尾で知らない者はない。長さは五六寸あつて上唇の上から顎の下まで下つてゐる。形は元も先も同じやうに太い。云はゞ細長い腸詰めのような物が、ぶらりと顔のまん中からぶら下つてゐるのである。（中略）今は僅に上唇の上で意気地なく残喘を保つてゐる。所々まだらに赤くなつてゐるのは、恐らく踏まれた時の痕であらう。（「鼻」）

「鼻」は、典拠「池尾禅珍内供鼻語第二十」の枠組みを崩してはいないが、主題的には典拠の筋書きを逸脱している事を以下記述する。理想が達せられた瞬間に幻滅感を体験するという作品本体の主題は、典拠「池尾禅珍内供鼻語第二十」になくて「靈験」（「坪内逍遙翻案」）にあり、この作品に接近して「鼻」創作に向かわせたのは、芥川龍之介の愛の喪失体験である。「鼻」が、菊池寛流の露骨なテーマ小説にならずに客観的に一個の滑稽小説成り得たのは著者の自らの心情の悲劇を客観的に鳥瞰する事の出来る余裕である。この文学的センスに対して漱石は、「自然其儘の可笑味がおつとり出てゐる所に上品な趣がありま

す」(「芥川龍之介宛書簡」大正五年二月十九日)と賞賛の言葉を寄せたのである。

然レバ堤ニ湯ヲ熱ク涌シテ、折敷ヲ其ノ鼻通ル許ニテ、火ノ氣ニ面ノ熱ク炮ラルレバ、其ノ折敷ノ穴ニ鼻ヲ指シ通シテ、其堤ニ指入レテゾ茹。(「池尾禪珍内供鼻語第二十」)

一もう茹つた時分でござらう。内供は苦笑した。これだけ聞いたのでは、誰も鼻の話とは気がつかないだらうと思つたからである。鼻は熱湯に蒸されて、蚤の食つたやうにむづ痒い。(「鼻」)

典拠にある即物的な治療話を著者は、生来のユーモアのセンスで滑稽譚に仕上げている。そしてその滑稽譚は、蘊蓄を傾けたものであって典拠の粗筋を逸脱する事大なるものがあって、この辺に自己の人生の悲劇を語るのにグロテスクなユーモアの色彩で彩る事を忘れない芥川龍之介の文学的才能がある。主題を語るに早急なテーマ小説から身を引いた、滑稽譚に意を注ぎ、道草の道中において感興を与える手法を評価して漱石は、「落着があつて巫山戯てゐなくつて」(「芥川龍之介宛書簡」大正五年二月十九日)と言つたのである。

紫色ニ成ツルヲ、蕎様ニ臥シテ、鼻ノ下ニ物ヲカヒテ、人ヲ以踏スレバ、吉ク茹テ引出タレバ、色ハ黒ク、ツブ立タル穴毎ニ、煙ノ様ナル物出ツ。其レヲ賣テ踏メバ、白キ小虫ノ穴毎ニ指出タルヲ、鑷子ヲ以テ抜ケバ、四分許ノ白キ虫ヲ穴毎ヨリソ抜出ケル。其ノ跡ハ穴ニテ開テナム見エケル。(「池尾禪珍内供鼻語第二十」)

弟子の僧は、内供が折敷の穴から鼻をぬくと、そのまだ湯気の立つてゐる鼻を、両足に力を入れながら、踏みはじめた。(中略)しばらく踏んでゐると、やがて、粟粒のやうなものが、鼻へ出来はじめた。云はば毛をむしつた小鳥をそつくり丸炙にしたやうな形である。(「鼻」)

「鼻」は、典拠に沿って書き流された箇所においても著者によるグロテスクな描写に富んでいて芥川龍之介の喪失した愛の奪回行為

にしては、極端な誇張表現が見られる。深刻な精神のドラマ、悲劇の様相を滑稽な非写実主義の立場で記述したところに文学的才能が見られるといえる。典拠「池尾禪池内供鼻語第二十」から「鼻」は、直接的には創作し得ない。芥川龍之介「鼻」(「新思潮」大正五年一月)を絶賛した漱石書簡は的を得たものであった。後年、彼は「遺伝、境遇、偶然、一我々の運命を司るものは畢竟この三者である。」(「侏儒の言葉」)と書いたが、今日から客観的に見ても「鼻」の芸術的な価値、文学的な意義についてその真価を認識し得たのは、漱石をおいて他に存在し得なかつたであろう。

かうなれば、もう誰も晒ふものはないにちがひない。一鏡の中にある内供の顔は、鏡の外にある内供の顔を見て、満足さうに眼をしばたゝいた。(中略)一前にはあのやうにつけつけとはわら晒はなんだ。(「鼻」)

「鼻」後半、理想が理想であるうちは輝いていて、達せられた時には失望感を覚えるという主題に関しては別の典拠「靈驗」を引き比べなくてはならない。

2 典拠「靈驗」(「坪内逍遙翻案」)

シング「聖者の泉」その翻案小説「靈驗」については、坪内逍遙自身が単行本「靈驗」緒言で両作品の解説を成している。

生来の盲人が男女共に甚だしい醜い顔をしてゐるのだが、周囲の者に欺かれて、非常に美男であり、美女であると自身して、永年の間相愛して夫婦になつてゐたのだが、一朝不思議な靈泉の奇特と法力に秀でた老僧の加持とで、忽然と目が開く、すると今迄自信してゐた事が悉く虚妄であると解り、所謂幻滅の悲哀にぶつかり、現実暴露のあさましさを経験し、盲目でゐた時分の方が遙に楽しかつたと悔み歎くといふ筋である。(坪内逍遙翻案小説「靈驗」緒言)

「靈驗」では、奇蹟により開眼した後の一組の夫婦が開眼体験により、醜悪なる現実を見る事で奇蹟に対する感謝の念を喪失して結

果的に霊水効果が無くなり、再度盲目の世界に立ち戻る筋展開である。現実の醜悪を目撃した乞食夫婦は、永遠に互いの醜悪な容貌を見る事のない暗黒の世界に生き続ける決心をするが、そこに再度役の行者の再来という触れ込みで飛雲上人が、霊水を持って開眼を勧める。それに対する盲目の乞食夫婦の返事は、以下の如くである。

「又さ（そんだから俺、目エあると不自由だちふだ。）」（中略）「おしや（躊躇して今のまゝにしといて下せえまし。五文十文づゝ貰つて、何にもしねえで、盲で、暢気に暮してるはうが、わしらしあはせ幸福だんべいから。）」（「靈驗」第三幕）

開眼体験を拒否する盲目の乞食夫婦に対する飛雲上人の返事は、真つ当なそれである。「子曰はく、之を如何、之を如何と曰はざる者は、吾之を如何ともする末きのみ。」（「論語」衛靈公第十五）、という「論語」の中の孔子の名言が示すように自覚なくして覚醒は存在しないのである。当然の事ながら飛雲上人の返答は、怒りに満ちたものである。

「（もてあまして）このやうな愚か者には何をいうても埒があかんわい。……縁無き衆生ぢや。」（「靈驗」第三幕）

「靈驗」の乞食夫婦は、一度の開眼体験を経て盲目の立場に戻った時に再び訪れた奇跡に依る永遠の開眼体験を拒否する事で闇の世界に生きる決心をするのである。先に引用した宇野浩二の批評が、的確に指摘するように「鼻」も「芋粥」も共に主題は同じで理想は理想として止まっている間が花で、その理想が達せられてしまった瞬間に理想は理想で無くなるという事である。

かつて福田恆存は、保守とは日常の衣食住の生活習慣を守ることであるという主張をした事があった。慣れ親しんだ食生活の記憶、生活習慣を一変させる激変は人間に対して限りない苦痛を与えるものである。防衛とは、歴史の繰り返しの中で親しんできた衣食住の生活習慣を防衛する事であるという考えである。

若かつたころの母が、或る雪の日に、作つてくれたホット・ケーキの味をも、夢が思ひ出させた。（中略）母の一生言はずに通した何かの憂悶が心の裡に在つて、それがそのときの母の妙に一心でひたむきな挙措や、常ならぬやさしさに、ひそんでゐたのかもしれない。（「天人五衰」七）

三島由紀夫「豊饒の海」（第四巻）には、味覚が記憶に結びつく印象鮮やかな場面がある。七十六歳の主人公にとって十六歳の時の味覚の記憶が、人生経験の全てを覆ってしまう場面である。「鼻」の主人公は、「靈驗」の乞食夫婦と同じく生活方法としては、保守に傾き従前の生活態度を崩そうとはしないのである。以前と同じ長い鼻を取り戻して、平穏な落ち着きを取り戻す事が出来るのである。むすび

「池尾禅珍内供鼻語第二十」（「今昔物語」）を典拠に「靈驗」の主題をなぞる形で、理想は達せられた瞬間に輝きを失うものだという主題で「鼻」を書き上げて、若い芥川龍之介は喪失した愛の幻影を自己の心の深層内部で処理しようとしたようだ。そして、その目論見は芥川龍之介の期待を裏切り、成功裡には終わらず傷口は拡大して後遺症は長く尾を引いて彼を苦しめたようである。「鼻」「芋粥」創作後の心境について芥川龍之介は、率直に次のように述べているからである。「何とも云へないはかない心もちがした。愉快なる可き小説が、一向愉快とも何とも思はれなかつた。」（「あの頃の自分の事・別稿」）

坪内逍遙「靈驗」から主題を借用して処女作「鼻」「芋粥」を創作した芥川龍之介は、以後信仰の問題を主題に据えた逍遙「役の行者」「法難」の直接的影響下にキリシタン作品群で信仰の問題に迫った。この間の事情に精通していたのは、早稲田英文科で逍遙の警咳に接した宇野浩二である。彼は「鼻」の主題が「靈驗」からの借用であると早くに指摘した。

II 「芋粥」

はしがき

「芋粥」（「新小説」大正五年九月）を考えるにおいては、それ以前の作品「鼻」（「新思潮」大正五年二月）創作時の事情まで考慮しなくてはならない。あるいは、さらにそれ以前の「羅生門」（「帝国文学」大正四年十一月）成立考まで視野に入れなくてはならないかも知れない。「羅生門」は、当時漱石の影響下にあった作家青木健作の好意で「帝国文学」に掲載になったもので、この作品の発表が芥川龍之介に作家になる決意をもたらしたと言える。一年前、第三次「新思潮」同人として参加しながら、その創作行為は翻訳等が主で見るべき作品がなかったからである。「ひよつとこ」（「帝国文学」大正四年四月）、「羅生門」等の作品発表が、学生であった芥川龍之介に作家たるべき自覚を促したと言える。

後年「あの頃の自分の事」（「中央公論」大正八年一月）で無名の自分の作品「羅生門」掲載に尽力してくれた青木健作に対する好意を書き残している。「羅生門」掲載の自覚が、数ヵ月後の「鼻」の創作行為に繋がり、漱石の絶賛に繋がり、最終的には第三次「新思潮」同人中、久米正雄、松岡譲に押されて傍流であった芥川龍之介は、第四次「新思潮」創刊号掲載の「鼻」に拠って久米正雄、成瀬正一を抑えて中心的存在になるのである。

拝啓新思潮のあなたのもものと久米君のもものと成瀬君のものを読んで見ましたあなたのもものは大變面白いと思ひます落着があつて巫山戯てゐなくて自然其儘の可笑味がおつとり出てゐる所に上品な趣があります夫から材料が非常に新らしいのが眼につきます文章が要領を獲て能く整つてゐます敬服しました。（「芥川龍之介宛書簡」大正五年二月十九日）

文学史上有名なこの夏目漱石書簡に因って芥川龍之介は、短くも華やかな栄光に満ちた文学的出発を遂げる事になるのである。この漱石書簡は、芥川作品の特徴を見事に言い当

てていると言える。材料の新しさ、そして格調高い文章こそ芥川文学最大の特徴となったからである。

「芋粥」は、芥川龍之介を発奮させた夏目漱石書簡から、半年後に当時有名な職業雑誌に掲載されたものである。当時、千葉県一宮海岸に久米正雄と共に滞在していた芥川龍之介に寄せた漱石書簡も「芋粥」評として文学史上名高いものであった。

啓只今「芋粥」を読みました君が心配してゐる事を知つてゐる故一寸感想を書いてあげます。あれは何時もより骨を折り過ぎました。然し其所に君の偉い所も現はれてゐます。（中略）芋粥の命令が下つたあとは非常に出来がよろしい。立派なものです。（「芥川龍之介宛書簡」大正五年九月二日）

同人誌作家として寄稿していた者が、初めて職業誌に作品掲載をなした事の成功と部分的な錯誤を言い当てている。漱石が指摘した文章の格調の高い事、文章の巧い事は、青年期芥川の夥しい習作類の作品群を知っている我々には、当然の指摘である。素材の新しさについては、典拠「今昔物語」に親しんだ事は、高等学校以来芥川龍之介が外国語漬けであった事の反動が考えられる。「一週独語九時間英語七時間と云うひどいめにあひ居候」（「山本喜誉司宛書簡」明治四十三年九月十六日）、これについては谷崎潤一郎「麒麟」「刺青」等の読書体験、漢籍、古典等を典拠とする先輩作家の創作手法が影響している。今昔物語を典拠とする「羅生門」「鼻」「芋粥」等の一連の創作行為により、一年後には第一創作集「羅生門」出版にこぎ着ける事になる。この最初の創作集を刊行したのは、夏目漱石没後であるが、創作集出版以前に夏目漱石は、芥川龍之介の隆盛振りを熟知していた。

「芥川君は賣ツ子二になりました。」（「成瀬正一宛書簡」大正五年十一月十六日）「羅生門」出版記念日（「大正六年六月二十七日」）、夏目漱石忌日（「大正五年十二月九日」）であるから「羅生門」（「阿蘭陀書房」大正六年五月）刊の主要作品は読んでいた事になる。

創作集「羅生門」に収録された作品は、発表順に記載すると「羅生門」（「帝国文学」大正四年十一月）、「鼻」（「新思潮」大正五年二月）、「孤独地獄」（「新思潮」大正五年四月）、「父」（「新思潮」大正五年五月）、「虱」（「希望」大正五年五月）、「酒虫」（「新思潮」大正五年六月）、「猿」（「新思潮」大正五年九月）、「芋粥」（「新小説」大正五年九月）、「手巾」（「中央公論」大正五年十月）、「煙草」（「新思潮」大正五年十一月）、「運」（「文章世界」大正六年一月）、「尾形了齋覚え書」（「新潮」大正六年一月）、「貉」（「讀賣新聞」大正六年三月）、「忠義」（「処女文壇」大正六年八月）、合計十四の作品であり最初の十作品を生前の漱石は目を通していた事になる。

ここで思い出されるのは「鼻」に寄せた漱石の賞賛の言葉である。「あゝいふものを是から二三十並べて御覧なさい文壇で類のない作家になれます」（「夏目漱石書簡」大正五年二月十九日）という芥川龍之介に宛てた助言である。「鼻」賞賛の書簡を受け取ってから、漱石が没するまでの一年未満の短期間に芥川龍之介は、単行本「羅生門」収録の十作品と小品を含めると優に二十を超える作品を執筆して師の漱石の期待に答えたのである。こうした経過を経て、「芥川君は賣ツ子二になりました。」という漱石の発言に繋がったのである。単行本「羅生門」収録「手巾」（「中央公論」）は、芥川龍之介の最初の晴れ舞台であるが、一ヶ月前の作品「芋粥」（「新小説」）も商業誌への最初の作品掲載である。

僕は芋粥を書いてゐる今までの所は大過なく来てゐるやうな気がするがよみ直さないから覚束ない十二枚でやつと「一」がすんだ（「松岡謙宛書簡」大正五年八月九日）この辺の事情について、「冒頭の十二枚に九日間を要している。（中略）したがって芥川は、最初の十二枚に九日を費消したにもかかわらず、あとの約四十枚は七日で仕上げた計算になる。」（「芥川龍之介と古典」第四章）と長野誉一が記している。この考証は、漱石書簡から類推されたもので「あれは何時もより

骨を折り過ぎました。細叙絮説に過ぎました。（中略）芋粥の命令が下つたあとは非常に出来がよろしい。立派なものです。」（「芥川龍之介宛書簡」大正五年九月二日）という批評がある。

芥川宛漱石書簡には、後年の芥川龍之介の文学的素質について言及したのものもある。「僕は不相變『明暗』を午前中書いてゐます。（中略）三四日前から午後の日課として漢詩を作ります。（中略）芥川君は詩を作るといふ話だからこゝへ書きます。尋仙未向碧山行。住在人間足道情。明暗雙三萬字。撫摩石印自由成。」（「芥川龍之介宛書簡」大正五年八月二十一日）

「芋粥」の理解については、早くから吉田精一の次のような見解が広く受け入れられていて、長く多くの批評家により受け継がれて来た。

原作の筋はほとんど『芋粥』と同じである。たゞ例によって珍奇で滑稽なものと話を一方では、忠実に辿りながら、その裏に人生に於ける理想なり欲望なりは、達せられない内に価値があるので、それが達せられた時には、理想が理想でなくなってしまう、却って幻滅を感じるばかりだという、人生批評を寓したのである。（「芥川龍之介 I」十一）

作品「芋粥」の主題は、上記の吉田精一の指摘で尽きていると思う、一方で私としてはさらなる主題を提示したい。それは、京の都の慎ましい、質素な貧弱な生活と地方の豊かな食生活との対比である。典拠「今昔物語」「宇治拾遺物語」に都、京都の下級官吏の生活と地方豪族の生活の対比の形でその原型はある。「芋粥」の主人公五位なる人物は、作中で執拗にその負け犬ぶりが描写されている。

唯、同僚の悪戯が、嵩じすぎて、鬻に紙切れをつけたり、太刀の鞘に草履を結びつけたりすると、彼は笑ふのか、泣くのか、わからないやうな笑顔をして、「いけぬのう、お身たちは。」と云ふ。（「芋粥」一）

この卑小な存在、主人公五位の造型は、典拠「今昔物語」「宇治拾遺物語」になくて習作期の芥川龍之介作品「老狂人」（芥川龍之介未定稿集 明治四十一年）「老年」（「新思潮」大正三年五月）「青年と死」（「新思潮」大正三年九月）において既に人物造型が成されている。青年期の芥川龍之介が、何故にこの種の人物造型に拘ったのかその深層心理の謎に迫るのは難しいが、作者の繊細な神経が現実の生の人生に直接迫るだけの器量に欠けていたことが理由として考えられる。「芋粥」は、典拠「今昔物語」を筋においてほぼ完全になぞる形で作品構成が成されていて、特筆すべきなのは人物造型である。徹底した負け犬「五位」なる人物造型のみが、典拠離れをしている。

五位は、風采の甚揚らない男であつた。第一背が低い。それから赤鼻で、目尻が下つてゐる。口髭は勿論薄い。頬が、こけてゐるから、頤が、人並はずれて、細く見える。（「芋粥」一）

この風采の揚がらない惨めな中年男「五位」の存在のみが、大きく典拠を逸脱して特殊な人物として「芋粥」の作品で生かされている。この人物造型は、典拠とは別に芥川龍之介の生来の深層の内部から生み出されたものである。故に「五位」の人物については先行の芥川作品にその足跡を求めなくてはならない。

「老狂人」（芥川龍之介未定稿集 明治四十一年）は「老年」（「新思潮」（「新思潮」大正三年五月）の先行作品であり、「死相」（芥川龍之介未定稿集 明治四十一年）は「青年と死」（「新思潮」大正三年九月）の先行作品である。芥川龍之介の習作、初期作品に顕著に見られる人生の敗残者の横顔は、作者のいかなる深層心理から生み出されてきたのか。これらの先行作品の内部から「鼻」（「禅智内供」）や「芋粥」（「五位」）の人物造型がなされた。

「老狂人」（芥川龍之介未定稿集）は、編者の葛巻義敏の解説に拠れば中学時代のノートに記載された三作品の一つである。葛巻義

敏引用の三作品についての芥川龍之介の解説文を以下引用すると。「“老狂人”、“チャムさん”、“草莓の蔭に眠れる蛇と蛙の話” — この三篇は、我が若き日の回顧にして情熱と憧憬と歎楽とに別るゝの悲哀なり。（後半略）」

「老狂人」については全文が、「チャムさん」についてはその断片が「芥川龍之介未定稿集」（葛巻義敏編）に載せられている。「チャムさん」は、芥川龍之介の実父新原敏三が、芝愛宕下の東京病院に入院していた時の体験を記述したものである。

私がこゝに来たのは、あそび仲間が沢山あつたからなので、大抵は この近所に住んでゐる病院の医員の子供でした、その中にかはつてゐたのは チャムさんです、チャムさんは、シヤム人で五六年前に日本に来たのですが、コーヒー色をした皮膚や、ちぢれた、はい〔灰か？〕黒い髪の毛は始終 皆に 笑はれてゐました、（芥川龍之介未定稿集）

大勢の遊び友達の中で毛色の変つたシヤムから渡来した子供について、その存在が皆の嘲笑的になっていたという少年時代の回想である。この大勢の遊び友達の少年少女の中には、後年芥川龍之介にとって宿命的な存在となる吉田弥生、東京病院会計課長を父に持つ少女の存在も在ったかも知れない。この作品断片は、周囲の大勢に溶け込む事の出来ない異色の存在について著者の視線を感じさせる。「草莓の蔭に眠れる蛇と蛙の話」は、作品そのものが喪失して存在しない。

「老狂人」（芥川龍之介未定稿集）には、荒削りの断片の内部に芥川龍之介の文学的源泉、その後の芥川文学の核が潜んでいる。私が、隣家の遊び友達と隠居の老人の繰言を聞くという設定である。この老人の慟哭の声を聞いて、遊び友達と笑いあつた事を後年の私が後悔するという設定である。この老人が、キリスト者であつて生の苦痛を天に向かつて訴える姿は、最晩年の芥川龍之介の姿に重なる。

「天にまします・・・・・・・・さん

たまりあ……つみ人を……」
きれぎれな、しかも深い感激にみちた、
祈祷の言が、低く、かなしく、私たちの
耳に、ひびきました。(中略)「可笑しな
奴だね」と笑った私は、今では、その
「可らしい奴」に、深い尊敬を感じずに
はみられません。あの祈祷と慟哭、信徒
を磔刑に處したと云ふ、封建時代の教訓
に反抗した、殉道の熱誠—私は、[未]
だに、あの時老狂人に加へ[た]嘲笑を、
心から恥ぢてゐます。(「老狂人」)

人生の負け犬となった人物を際立たせる創
作行為、周囲に溶け込む事の出来ない異端者
に注意し関心を寄せる視線において著者の作
品構図は、同一である。こうした作品構図の
延長戦上に「老年」(「房さん」)の人物造型
がなされて、「芋粥」(「五位」)の人物造型に
繋がったと考えていい。

「老年」は、一中節の順講に参加した十二、
三人の体験、茶式料理店での出来事である。
雪の降りつむ夜半に過ぎ去った日々を繰り言
を繰り返す老人は、端唄本、二、三冊を広げ
て減ってしまった江戸情緒に浸るのである。
二人の参加者が、零落して失われた時間に思
いを寄せる老人の寂寥感を共有する事になる。

「(前文略) 自体、お前と云ふものがあるの
に、外へ女をこしらへてすむ訳のものぢやあ
ねえ。そもその馴初めがさ。歌沢の浚ひで
己が「わがもの」を語つた。あの時お前が……
」(「老年」)

人生を生き切った敗残の老人と過ぎ去った
江戸文化の名残が、雪の降り積む夜に二人の
傍観者により目撃される。滅び行く者の敗残
の名残を、死の残影を傍観者が生の位置から
目撃する、この構図は芥川龍之介文学のその
後の基本的な構図である。この文学的な構図
は、より具体的に死の存在により生の形象を
模索する他の作品、「死相」(「芥川龍之介未
定稿集」明治四十一年)「青年と死」(「新思
潮」大正三年九月)で具体的に作品化されて
いる。

「死相」は、若い自分が年を取った古い師

により死の予兆を予言され、予兆のとおり
訪れる死の足音を静かに聴く話である。話の
展開は、あからさまな漱石「夢十夜」の模倣
であるが、若い芥川龍之介の死の予兆は、朱
夏の向日葵の花卉の落下の音に死の足音を聴
く、禍福しくも若さと生命の横溢に満ちた記
述である。

「日輪がの。一日のうちに、暮くなる日
が来るのぢや。—赤い日のおもてを、暗い
影が蝕む日よ。それを知らず、烏のむれが、
輪をかいて鳴かう日よ。—その日には、
向日葵が散るがの。その花が散りつくすと、
—やがて、若い命が亡ぶのぢや。(後文略)」

生命横溢の向日葵の花卉の落下に死の足音
を聞く、「夢十夜」と比較すれば「死相」に
は、若い筆者の生命感が漲っているが、死の
予兆を生命充実した朱夏の向日葵の下で聴く
構図は、「鼻」「芋粥」の人物造型に無縁では
ない。「死相」で扱われた予兆としての死の
訪れは「青年と死」で複雑な陰影を帯びて作
品展開をする。死の訪れを待つ、A、B二人
の男は、快楽をむさぼり永世を願ったBのみ
が死に導かれて行く。死をめぐる対話形式の
思想劇は、典拠が「痴人と死と」(「ホーフマ
ンスタール」)に拠ると小堀桂一郎「芥川龍
之介の出発」にある。この種の先行作品の連
鎖の中で「ひよつとこ」(「帝国文学」大正四
年四月)が、創作されている。この作品は、
第一創作集「羅生門」(「阿蘭陀書房」)には、
収録されていない。

大川の吾妻橋の上の桜見物の客は、隅田川
を行き来する伝馬船の上でひよつこの面を被っ
た男が、頓死して船の中に転がり落ちるのを
目撃する。平吉の最期の頼みは、「面を……
面をとつてくれ……面を。」(「ひよつ
とこ」五)である。瀕死の素顔の平吉の横で
変わらないのは橋の上の花見客の罵声を浴び
たひょうきんなひよつとこの面ばかりであ
る。

「しかし面の下にあつた平吉の顔はもう、
ふだんの平吉の顔ではなくなつてゐた。
(中略)ただ変らないのは、つんと口をと

がらしながら、とぼけた顔を胴の間の赤毛布の上に仰向けて、静に平吉の顔を見上げてゐる、さつきのひよつとこの面ばかりである。」（「ひよつとこ」五）

衆人監視の中、伝馬船の中で頓死する平吉の生死を間に挟んで、嘘で固めた平吉の人生が披露される。嘘で固めた平吉の人生とひよつとこの面とは、微妙に重なり合い衰退する江戸文化と相まって芥川龍之介の創作意識を刺激したと思われる。「ひよつとこ」の平吉の人物造型は、直接に「鼻」「芋粥」の主人公の造型に繋がる。

1（「芋粥」一）

「芋粥」の典拠は、「今昔物語集巻第二十六」（「利仁の將軍若き時京従り敦賀に五位を將て行く語第十七」）「宇治拾遺物語巻第一」（「利仁芋粥の事」十八）であるが、二つの典拠は一読した限りでは、ほぼ同じ内容で異同は無いようである。「芋粥」は典拠の粗筋をほぼなぞっているが、作品主題を妨げると思える二ヶ所ほどを削除している。その第一は、五位が利仁により越前の国に到着後に夜の伽、女人の接待を受ける場面である。

傍二人ノ入気色有。誰ソト問へバ、女音ニテ、「御足参レ」ト候へバ、参り候ヒツル」ト云気ヒ不憎バ、搔寄テ、風ノ入所ニ臥セタリ。（「今昔物語集第二十六」第十七）

五位とは昇殿を許された最下位の階層であるがあるが、当時の貴族社会の一員として地方視察の折には、寝所では一般的風習として夜の伽の接待を受けたのである。典拠のこの記述は、「芋粥」の負け犬としての五位の人物造型にそぐわない為に著者により意識的削除されたのである。さらに第二の削除の箇所は、説話の最終場面での後日談である。長年都の貴族社会に属する者が、地方視察と短期滞在で多くの贈呈品で物持ちになって都に帰還するという結びの一文である。

仮納ノ装束数下調へテ渡シケル。（中略）実ニ、所ニ付テ年来ニ成テ被免タル者

ハ此ル事ナン自然ヲ有ケル、トナン語り伝ヘタルトヤ。（「今昔物語集第二十六」第十七）

この第二の削除箇所も第一の削除箇所と同じく、「芋粥」の五位の惨めな人生にそぐわない記述であり、筆者は意識的に削除した事と思う。

「芋粥」(一)は、作品「芋粥」の導入場面であり、典拠離れの著しい箇所である。平安末期の貴族社会の現状を、「今昔物語集」に拠りながら芥川龍之介が、蘊蓄を傾けた場面であり著者の知識の蓄積を窺わせ、努力と苦心が見られる。「芋粥」(一)は、原稿用紙十二枚であるが、この冒頭部分に九日間を費やしたのである。この苦心に対して漱石は、「あれは何時もより骨を折り過ぎました。然し其所に君の偉い所も現はれてゐます。」と批評したのである。

「芋粥」の主人公五位の人物造型には、ゴゴリ「外套」の作中人物の卑小な小役人の姿が影響しているという先学の指摘は、多くこの「芋粥」(一)に当てはまるであろう。又、作中の物語展開から視点をずらして著者が鳥瞰的位置から論評を加える創作手法もまた「羅生門」以来のものである。言い古された事であるが、この種の高踏的創作手法が「新理知派、新技巧派」なる文壇的名称を受けた理由でもある。当時、隆盛を極めた自然主義に文学の立場から見れば、その洗練された文体は反自然主義そのものであった。筆者自身、出発当初からこの件については十分なる認識を持っていた事は以下の引用文で明らかである。

一体旧記の著者などと云ふ者は、平凡な人間や話に、余り興味を持たなかつたらしい。この点で、彼等と、日本の自然派の作家とは、大分ちがふ。王朝時代の小説家は、存外、閑人でない。（「芋粥」一）

自然主義文学に対するこの種のあからさまな挑戦を老練な作家である漱石は、喜ばなかつたはずである。若さを誇る未熟さをしかし、一方では容認した事は「云はゞ君等の若々し

い青春の気が、老人の僕を若返らせたのです。」(芥川龍之介宛書簡 大正五年八月二十四日)という書簡から窺う事が出来る。自然主義文学に対する挑戦は、数ヵ月後の「MENSURAZOILI」(「新思潮」大正六年一月)で作品主題として取り扱われる事となる。「新小説」(「芋粥」)という最初の商業雑誌に掲載する作品であるという自覚は、反自然主義文学作品を書くという自覚は、典拠を「今昔物語集」という典籍に拠る創作行為により明白である。

「芋粥」の五位なる負け犬の人物造型が、先行の芥川作品にその原型を求める事が出来るという事を「はしがき」で述べたが、この負け犬の人物造型の存在意義について「芋粥」(一)で筆者が、説明を加えている箇所がある。

「いけぬのう、お身たちは。」と云ふ。その顔を見、その声を聞いた者は、誰でも一時或いぢらしさに打たれてしまふ。(彼等にいぢめられるのは、一人、この赤鼻の五位だけではない。彼等の知らない誰かが一多数の誰かが、彼の顔と声とを借りて、彼等の無情を責めてゐる。)「芋粥」(一)

筆者の解説に拠れば「芋粥」の五位は、支配階層の前に屈服する被支配階層の象徴である。「いけぬのう、お身たちは。」という五位の発言は、そうすると被支配階層の自嘲と諦めの言葉である。五位の負け犬の発言に対して、多くの者は瞬間的に自責の念を持つが一時的なものである。その中で一人、丹波の国から来た「或無位の侍」が、五位の諦めの発言を心に留めた。無位の侍は、五位の存在をどう心に留めたのか。都の貴族社会の階級制度の最下位にいる者に対して憐憫の情だけでなく、ある種の畏敬の念を持ったからである。

「いけぬのう、お身たちは」と云ふ声を聞いてからは、どうしても、それが頭を離れない。それ以来、この男の眼にだけは、五位が全く別人として、映るやうになつた。(「芋粥」一)

無位の侍の目に映った、別人としての五位

とはその実態はいかなる存在であるか。「所得たる五位ありけり。」「きう者なれども、所につけても、年比になりて許されたる者は、さる者のおのずからあるなりけり。」(「宇治拾遺物語」)、古参の者であつたので、職責上の利権が時として手に入ったという結論である。(「宇治拾遺物語」は、「きう」者を利仁と理解している。)

典拠「宇治拾遺物語」の五位は、摂政家に勤務する貴族階級の一員であり、その実態はそれほどに惨めな境遇ではなかつたはずである。「所得たる五位ありけり。」(古参のために得意顔で大きな顔で振舞う五位の侍がいた)、ただ「芋粥」は都勤務の貴族の慎ましい生活に比して、地方豪族の経済的基盤の豪快な事を対比的描いたと言える。時代は下がるが「徒然草」にも都在住の者が、安請け合いをして経済的基盤が脆弱なために有言不実行になりやすい事を兼好法師が、弁護する段があつた。「芋粥」の主題の一つとして勃興する地方武士の経済力が、都在住の貴族の生活を凌駕する事が挙げられる。

芥川龍之介が「芋粥」(一)に九日間を費やした理由は、典拠に無い話を序章として付け加えたためである。その多くは、負け犬五位の人物造型と広く典拠を渉獵して平安末期の京都の現実を再現する事に意を注いだ結果である。疲れ果てて、典拠の頭注をそのまま写し取る愚を冒して、剽窃に近い行為を成した。重松泰雄「芋粥」に拠れば、芋粥の本文中の説明は、典拠である博文館「校註国文叢書」の頭注を全部我流に写し取っている。

芋粥とは山の芋を中に切込んで、それを甘葛の汁で煮た、粥の事を云ふのである。当時はこれが、無上の佳味として、上は万乗の君の食膳にさへ、上せられた。(「芋粥」一) (「薯預は薯預也、山の芋をいふ、即山の芋を切込み甘葛(アマズラ)の汁にて煮粥をいふ。頗る珍品にて当時主上にもきこしめし又上流社会にも、もてはやされたる事物語類に見えたり。)

初めての商業雑誌に掲載の作品という事で、

資料に寄り掛かりすぎて流露感に乏しい作品になった事を漱石は、「あれは何時もより骨を折り過ぎました。細叙絮説に過ぎました。」（「芥川龍之介宛書簡」大正五年九月二日）と的確に批評した。

青鈍あおにび すいかんの水干と、同じ色の指貫さしぬきとが一つ筒あるのが、今ではそれが上白んで、藍とも紺とも、つかないやうな色に、なつてゐる。水干はそれでも、肩が少し落ちて、丸組の緒や聞く緩じの色が怪しくなつてゐるだけだが、指貫になると、裾のあたりのいたみ方が一通りでない。（「芋粥」一）

（薄綿うすわた きぬふたノ衣ぼかりニツ許、青鈍あおにびノ指貫さしぬきノ裾壊すそやぶれタルニ、同色かりぎぬノ肩少シ落タルヲ着テ、下の袴ひきめがしモ着ズ、（中略）狩衣かりぎぬノ後ハ、帯おビニ被引ひきめがしラレタルヲ、引モツクロワズ、ユガミながら乍ラアレバ、可咲をかしかれドモ）

五位の人物造型は、ゴーゴリ「外套」を典拠とするという久米正雄の発言が有名であるが（「座談会」昭和十一年九月）、負け犬五位の原型は、すでに典拠「今昔物語」にあると言える。「芋粥」で創作された五位の負け犬としての特性、性格や境遇の不遇な事はすでに典拠にあると言える。

「芋粥」(一)には作者が本意に漏らした主題が、作中に顔を出している。主題としては、「芋粥」は先の作品「鼻」の主題を引きずっている。京の都で下級官吏として、人々の嘲笑を浴びながら屈辱に耐えて生きる五位にとっては、屈辱そのものが人生に化している。

「芋粥に飽かむ」という満たされる事のない希望を胸に秘めて日々を生きる事は、人生の生きがいであり、ささやかな望みの達成は、彼のそれまでの人生を破壊して夢を破る行為である。

一人間は、時として、充たされるか充たされないか、わからない欲望の為に、一生を捧げてしまふ。その愚を晒ふ者は、畢竟、人生に対する路傍の人に過ぎない。（「芋粥」一）

かつて防衛論議が盛んな一時期、人的犠牲

を支払って守るべきほどの祖国は存在しない。ハワイに次いで米国の五十一番目の州になる事も可、ソ連の属国に下落してもよいではないかという議論に対して福田恆存が、守るべきは我々日本民族の衣食住の生活習慣である、という論陣を張った事がある。数千年来繰り返されてきた食文化、住文化、生活習慣を破壊される事は民族的な滅亡につながるという意見である。

2（「芋粥」二）

「芋粥」(二)から、典拠「今昔物語集」「宇治拾遺物語」の粗筋をなぞるようになる。長野嘗一「芥川龍之介と古典」は、芥川龍之介の王朝に素材を得た作品を酷評して以下のように述べた。

「地獄変」「藪の中」の二つは、よかれあしかれ芥川の創作という名に値する。が、「芋粥」「六の宮の姫君」の二篇は、そう呼ぶには大きな抵抗とためらいを感じざるを得ない。酷評すれば今昔物語の現代語版ともいえるのだ。（「芋粥」四）

先に述べた如くに「芋粥」(一)は、典拠を離れた芥川龍之介の知識を披露した場面であり、筆者の苦心と努力と跡が著しい箇所ではある。「芋粥」(二)から典拠の素材の筋を追う物語の展開を見せるわけである。当時、外国文学全盛の時代に詠み捨てられていた古典文学、とりわけ説話文学中の「今昔物語集」に注目したのは手柄だし、「利仁將軍若時從京敦賀將行五位語第十七」（「十八 利仁芋粥の事」）の話に注目した着眼点そのものが手柄である。言い古された言い回しで表現すれば、「コロンブスの卵」なのである。

しかし、三島由紀夫が言うように芥川龍之介は、典拠なしで自由に創造の羽を伸ばせなかった作家である。「型を意識せずには、作品の質を上げることのできなかつた作家である。」（「南京の基督」解説）、「芋粥」(二)は話の筋としては、流れるような展開を見せていて物語としての起伏に富んでいる。五位と彼を敦賀に誘い出す利仁のやりとりは、生彩

に富んだもので二人を見守る周囲の者たちの無関心ぶりも話の展開に即したものである。「宇治拾遺物語」（「利仁芋粥の事」）によれば、「芋粥」（二）の典拠となった箇所は、わずか数行である。

その所に、年比になりて給仕したる者の中には、所得たる五位ありけり。そのおろし米の座にて、芋粥すすりて、舌打をして、「あはれ、いかで芋粥に飽かん」といひければ、利仁これを聞きて、「大夫殿、いまだ芋粥に飽かせ給はずや」と問ふ。五位、「いまだ飽き侍らず」といへば、「飽かせ奉りてんかし」といへば、「かしこく侍らん」とてやみぬ。

この数行の即物的な記述から「芋粥」（二）を創作したのは、若い芥川龍之介の才能である。そして芥川龍之介の文学的素質とは、最終的にこの種の才能である。作品「芋粥」は、後半になるにつれて典拠に寄りかかり、文体そのものが流動的になってくる。読み慣れ親しんだ古典作品を我流に書き直す作業に成って行ったからである。この間の事情について漱石は以下のような評価を下した。

惜い事に君はそこを塗り潰してベタ施しました。是は悪い結果になります。然し。芋粥の命令が下つたあとは非常に出来がよろしい。立派なものです。（「芥川龍之介宛書簡」大正五年九月二日）

これは、「芋粥」についてあくまでの漱石の評価である。読み慣れた古典作品を自由に書き下した後半が、良いと評価された事で芥川龍之介は、自身の空想力に自信を失ったかどうか。結果的に、この時の漱石の批評が芥川作品の方向を決定づけたかも知れない。以後、彼は典拠に寄りかかって創作行為を繰り返し、典拠を離れる傾向を示し始めた時に芥川文学は衰退の兆候を見せ始めるのである。

3（「芋粥」三）

「芋粥」（三）からは、作品は典拠をそのままなぞる方向で進展する。執筆日数十六日間の内九日間は「芋粥」（一）と「芋粥」（二）

に費やされた、一週間程度の期間で残りを執筆できた理由は、筆者が典拠を逸脱する事なく書き継いだからである。容易に書き続けた後半部分を漱石に賞賛された事が、後の芥川龍之介の創作行為を規定した事は確実である。

同時代作家で芥川龍之介の恩恵を受けた者で感謝の言葉を述べた者は、ほぼ皆無であるが、芥川龍之介の中国視察旅行の報告で刺激を受けて二年後に上海行きを成して以後、中国にのめり込んだ村松梢風もその一人である。「此の手紙を貰つた時の芥川の一抔のくすぐつたい顔付も想像されるが、悪く邪推すれば世間くみし易しと思つたかも知れない。」（「近代作家伝」）、これは「鼻」について賞賛した漱石の書簡（「芥川龍之介宛書簡」大正五年二月十九日）について言及したものである。「芋粥」は最初の商業雑誌掲載作品で、この作品についての漱石書簡の前に二人の間にやり取りされた書簡が、今日残されている。

君の方はそんな譯のあり得ない作風ですから大丈夫です。もう一週間すると分ります。適中したら僕に禮をお云ひなさい。外れたら僕があやまります。（「芥川龍之介宛書簡」大正五年八月二十四日）

この漱石書簡を受けて芥川龍之介が、漱石に宛てて「芋粥」の作品評価についての心配を書き記したのが、以下の書簡である。

いよいよ九月の一日が近づくので、あんまりいゝ氣はしません。先生にあやまつて頂くよりは、御禮を云ふやうになる事を祈つてゐます。（「夏目金之助宛書簡」大正五年八月二十八日）

以上のような書簡のやり取りを検証すると漱石「芋粥」評は、全文賞賛に成り得ない事情を持っている。結論的に言えば、漱石書簡（「芥川龍之介宛」大正五年九月二日）は、漱石がその才能を愛した後事を託すべき優れた弟子に対して贈った最大限の賛美である。典拠に沿った「芋粥」後半部分を認められた事、短時間に仕上げた作品後半部を賞賛された事は、一時的に芥川龍之介の自尊心を傷つけた

かも知れない。村松梢風が言うように漱石は典拠である今昔物語は読んでいなかったであろう。「此の英文学の大家も今昔物語は読んでみなかったと解釈するより外はなく」（「近代作家伝」）、細部に至るまで典拠に沿う筋展開を持つ「芋粥」（三）以降は、内容的に芥川龍之介の独創はない。

しかし、これも今日から見ての相対的見解である。外国文学全盛のこの時期、日本古典とりわけ傍流的作品「今昔物語」についてこれほどの読み込みの確かさを提示し、熟知の認識を示した事は芥川龍之介の手柄である。旧制第一高等学校が、外国語学校に類似のカリキュラム構成であった事が、彼に日本古典に対する学習意欲を持続させたのであろう。

六年前に同じような内的必然から、歌舞伎、浮世絵等文化文政の素材を典拠に「刺青」を、論語を素材に「麒麟」を作品化した谷崎潤一郎の先例があった。永井荷風は「麒麟」の文章を「タイス」の書き出しに比較し、「刺青」の冒頭を三味線の前弾きと評した。「鼻」「芋粥」は、同じように外国文学に精通した者のみが成し得る着眼点を持っている。典拠に沿う「芋粥」（三）以下の作品後半は、作者の独創的側面に欠けていても総体的にすべてが、先に言及した如くに「コロプスの卵」なのである。「芋粥」は、当時の、いや今日の国文学のみの素養の者には成し得ぬ創作行為である。

大学卒業直後、友人久米正雄と千葉県一宮海岸にヶ月滞在した折の精練の氣に富んだ一時期の氣迫が、「帳裡日月長」（「夏目金之助宛書簡」大正五年八月二十八日）の氣が「芋粥」（三）以降にはある。「鼻」「芋粥」両作品は、「麒麟」「刺青」に比類し得る作品である。

「芋粥」（三）には、後年新羅征伐を命じられたという伝説を持つ藤原利仁の若き日の雄雄しい姿が活写されている。敦賀への長旅の不安を訴える五位に対して、利仁が答える返事には著者の若々しい姿の投影がある。教養高い、都の貴族社会に属する者の物惜しみの

質素な生活、都から一步離れる毎に不安を訴える行動力に欠ける生き方には、漱石山脈の末席に連なる芥川龍之介の古参の弟子に対する思いの一端が窺える。

「己レー人ガ待ル八千人ト思セ」（「今昔物語」）

（「利仁が一人居るのは、千人ともお思ひなされ。路次の心配は、御無用ぢや。」三）

同伴の五位に対して心強く、断言する行動の人の背後には、若い芥川龍之介の漱石の古い弟子たちに対する意気軒昂振りの反映であろう。都の朝廷で無官の利仁は、典拠の記述を離れて芥川龍之介により次のように簡潔に記述されている。

この朔北の野人は、生活の方法を二つしか心得てゐない。一つは酒を飲む事で、他の一つは笑ふ事である。（「芋粥」二）

無骨な武力を軽蔑して、教養の高みで暴力を軽蔑しながら内心では、都の狭い階級世界に止まり周辺に勃興する武士に対して恐怖感を抱いて生きる者の生態を生々しく描いたのは、狐に伝言を仮託する場面である。都の世界以外を異郷として、見下していながら一步も辺境に進出する事など思いもよらない五位の長年の都での生活の片鱗を窺い知る事の出来る挿話である。

『俄ニ客人具シ奉テ下ル也。明日ノ巳時ニ、高島ノ辺ニ、男共迎ヘニ馬ニ匹ニ鞍置テ可詣来』（中略）「広量ノ御使哉」（「今昔物語」）

（『利仁は、ただ今俄に客人を具して下らうとする所ぢや。明日、巳時頃、高島の辺まで、男たちを迎ひに遣はし、それに、鞍置馬二匹、牽かせて参れ。』（中略）「広量の御使でござるのう。」三）

「広量ノ御使哉」（「当てにならないお使者ですわね」）は、五位の率直な発言であるが、広大な辺境を馬で疾駆する武士階級の野蛮な行動力を認識外として、認知し得ない都人の率直な発言である。

4（「芋粥」四）

「芋粥（四）では、典拠「今昔物語」にある狐に伝言を託す、異類との対話の挿話の場面は、ほぼ全部使っている。

「^{まらうどく}客人具^{たてまつり}シテ奉^{にはか}テナン^{にはか}俄^{にはか}二下ルヲ、明日ノ^{みのおき}巳時二、馬二匹二鞍置テ、男共^{くらおき}高島ノ^{たかしま}辺^{ほと}り二参り合へ」（「今昔物語」）

（『殿は唯今俄に客人を具して、下られようとする所ぢや。明日巳時頃、高島の辺まで、男どもを迎ひに遣はし、それに鞍置馬二匹牽かせて参れ。』四）

説話文学の中で「今昔物語」「宇治拾遺物語」に何故関心を抱いたか、「今昔物語集第二十八」（第十七）「宇治拾遺物語卷第一」（第十八）を典拠に何故「芋粥」創作の意欲を抱いたのか。創作意欲は、芥川龍之介の年少からの奇談、怪奇に対する好奇心から発したものである。狐が利仁の妻に憑依して語る発言内容の基になった利仁の発言は、以下である。

「^{にはか}俄^{まらうどく}二客人具^{たてまつり}シ奉^{にはか}テ下ル也。明日ノ^{みのおき}巳時二、^{たかしま}高島ノ^{ほとり}辺二、男共^{くらおき}迎へ二馬二匹二鞍置テ可^{まうでまらべし}詣来」（「今昔物語」）

（『利仁は、唯今俄に客人を具して下らうとする所ぢや。明日、巳時頃、高島の辺まで、男たちを迎ひに遣はし、それに、鞍置馬二匹、牽かせて参れ。』三）

「今昔物語集第二十八」（第十七）の典拠では利仁の狐に向かったの発言が、憑依の妻によりほぼ同文で繰り返されている。「芋粥」創作で芥川龍之介は、典拠に変更を加える事なくほぼ全部をそのまま使っている。「宇治拾遺物語卷第一」（第十八）もこの箇所については、ほぼ大同小異である。憑依現象の具体的な記述は、作品に即して検証すると。

「夜前、戌時ばかりに、奥方が俄に、人心地をお失ひなされましてな。」（「芋粥」四）「それから、多愛なく、お休みになりました。手前共の出で参ります時にも、まだ、お眼覚めにはならぬやうで、ございました。」（「芋粥」四）

「芋粥」執筆の最大の動機は、おそらくは「今昔物語」の多くの怪奇、奇談の中でこの

憑依現象が芥川龍之介の創作意欲を強く刺激したからではないかと思う。こうした趣味は、すでに早くに萌していた事が今日では、芥川夫人の回想で知られている。

一高次代にも『椒図志異』というノートを作り、読んだ本や、両親や友人などから聞いた話の中から、妖怪の話をもメモしたりしていたそうです。（「追想芥川龍之介」）

怪奇現象に対する興味は、晩年になるにつれて増大し最晩年の芥川龍之介の精神傾向は相当にオカルト的であった。彼のこの種の怪奇趣味が、奇蹟と復活を柱とする新訳聖書に対する多大な興味に繋がったものと思われる。最晩年の作品「古千屋」（「サンデー毎日」昭和二年六月）は、同じく憑依現象を主題に据えた歴史小説である。

怪奇現象を恐れながら、合理的精神ではそれを否定する都貴族の五位の発言は、「広量の御使でござるのう。」（「頼りにならないお使いですね」）である。狐を捕えて自在に操る野人利仁の圧倒的の力量の前に屈服する五位の発言は、「何とも驚き入る外は、ござらぬのう。」（「芋粥」四）である。宮廷では無官でありながら、勃興する地方武士の圧倒的な気迫が都貴族の存在を凌駕する場面である。

5（「芋粥」五）

「芋粥」（五）は、ほぼ典拠をなぞっていて作者がとりわけ書き加えた箇所は見出せない。しかし、「芋粥」に込めた作者の一個の主題は、「芋粥」（五）の内部に鮮明に書き加えられている。

色のさめた水干に、指貫をつけて、飼主のない彪犬のやうに、朱雀大路をうろついて歩く、憐む可き、孤独な彼である。しかし、同時に又、芋粥に飽きたいと云ふ欲望を、唯一人大事に守つてゐた、幸福な彼である。（「芋粥」五）

京都での惨めな宮仕えの屈辱の日々を支えたのは、「芋粥に飽かむ」という切ない希望である。同僚の冷笑も、子供達からの侮蔑もすべては、「芋粥に飽かむ」という悲願と共

に五位の人生のそのものである。悲願の達成は、五位の人生そのものを破壊する行為でもある。この作品主題の趣旨を説明する意味で作者は、作中で次のような一文を付け加えた。

出来る事なら、何か突然故障が起つて一旦、芋粥が飲めなくなつてから、又、その故障がなくなつて、今度は、やつとこれにありつけると云ふやうな、そんな手続きに、万時を運ばせたい。(「芋粥」五)

他者から加えられる情け容赦のない侮蔑も、その侮蔑を発条とするささやかな野心もそれは、その人の人生そのものである。他者が重荷を背負う行為は、その人の人生そのものを破壊し、別の人生を強要する事に他ならない。「芋粥」一編は、こうした主題を「今昔物語」を典拠とする挿話に託して芥川龍之介は、一個のテーマ小説として作品完成を期したのである。

「芋粥」は、露骨なまでに主題を強要するテーマ小説である。その意味で半年以前の作品「鼻」(「新思潮」大正五年二月)とその作品的位置づけを同じくしている。蛇足ながら、小説としてテーマ小説を露骨に追求したのは、菊池寛「藤十郎の恋」である。この作品は、「新思潮」編集の責任を負っていた芥川龍之介の拒否にあわなければ「鼻」と同時掲載になり、「鼻」以上に漱石の絶賛を受けて菊池寛を芥川龍之介以上の華やかさで文壇に押し出したかも知れない作品である。

今僕が或テエマを捉へてそれを小説に書くとする。さうしてそのテエマを藝術的に最も力強く表現する為には、或異常な事件が必要になるとする。(中略)不自然の障碍を避けるために舞台を昔に求めたのである。(「澄江堂雜記」三十一)

上記の理由から、最下層とはいえ昇殿を許された五位の宮廷での立場は、完全に無視されて無官の地方武士の豪気の前に屈服する姿が、単純化されて記述されていくのである。

「芋粥」(五)は、ほぼ忠実に典拠に沿って物語り展開を見せながらも主題を生かすための無意識な逸脱をしている。「芋粥に飽かむ」

という宿願の野望の達成を目前にして五位は、次のような逡巡を見せるのである。

第一、時間のたつて行くのが、待遠い。

しかもそれと同時に、夜の明けると云ふ事が、一芋粥を食ふ時になると云ふ事が、さう早く、来てはならないやうな心もちがする。(「芋粥」五)

このときの五位の胸中は、作中に作者の抱いた主題を明言するもので「典拠」を逸脱していてテーマを生かすための、虚構の人物である。「一その頃摂政藤原基経に仕へてゐる侍の中に、某と云ふ五位があつた。」(「芋粥」一)という作品冒頭の人物紹介は、すでに「芋粥」が典拠を逸脱する事を、歴史上の人物として特定される事のない普遍的な人物の話である事を明言している。典拠での五位の気持ちの変化は、以下の如くに極めて平凡、健康な人間の感覚である。

亦若キ男共十余そのこどもじふよにんばかりいできたり人許出来テ、祛ヨリ手ヲ出シテ、薄キ刀ノ長ヤカナルヲ以テ、此ノ暑預ヲ削ツ、撫切ニ二切ル。(中略)見二、可食心地不為、返テハ疎シク成ヌ。(「今昔物語集第二十六」(第十七))

膨大な量の芋粥を目前にして、食欲そのものを喪失するのは、健康な人間の通常の生理である。平安末期の通常な人間の健康な食欲を芥川龍之介は、近代人のそれに變形させたのである。主題を際立たせるための作者の工夫は、典拠に沿いながらも微妙な改変を行っている。

「狐も、芋粥が欲しさに、見参したさうな。男ども、しやつにも、物を食はせてつかはせ。」利仁の命令は、言下に行はれた。軒からとび下りた狐は、直に広庭で芋粥の馳走に、与つたのである。(「芋粥」五)

(而ル間、向ヒナル檐しか狐指臨あいだキ居タルヲ、利仁見付ケテ、「御覧ゼヨ、昨日ノ見参スルヲ」トテ、「彼レニ物食セヨ」ト云ヘバ、食ハスルヲ、打食テ去ニケリ。)

五位の長年の宿願である「芋粥に飽かむ」(一)という希望は、容易に叶えられた。しかし、それは「五斛納釜を五つ六つ」(五)

という膨大な芋粥で彼を圧倒するものであった。

「芋粥」(五)は、年来の彼の都での慎ましい人生を破壊し、彼の惨めであったが明日に希望を託した本来の生を否定して、目標のない当ての無い日々を約束するものであった。呆然とする彼の目前で、思う存分芋粥のご馳走に与る狐の存在は、彼のそれまでの希望に満ちた人生を嘲笑するものである。

「芋粥」については、早くに吉田精一「五位にせよ副主人公たる利仁にせよ(中略)原作でもすでにその性格を暗示されて居り、多少の想像力で、龍之介の描き上げた程度の個性は髣髴出来る。」(「芥川龍之介I」十一)という指摘があるが、続いて「しかしこの作品は彫心鏤骨の苦心をしたものは彼の作中でも稀であり、それだけの精巧さは十分あって、彼の一代表作とするに足るものであろう。」とも述べている。

「芋粥」は、若い芥川龍之介が初めて商業雑誌に掲載した作品であり、吉田精一の言うように彫心鏤骨の作品である。漱石が批判した箇所は、作品前半部であるが、「芋粥」前半部にこそ英吉利文学を専攻した若い学徒である芥川龍之介の腐心の痕跡の跡が見られる。「味煎づ」(「あまらみせん」五)という特殊な語彙を始めとして「芋粥」前半部には、「今昔物語集」に関する知識を動員して創作行為に邁進した著者の苦心が見て取れる。作品創作時までの十年の年月を外語漬けで日々を送った芥川龍之介にとっては、「芋粥」前半部分の考証に類する記述は、苦心の程が偲ばれる箇所でもある。

むすび

初めての商業雑誌「新小説」掲載の作品「芋粥」は、印象深い作品であつたらしくて芥川龍之介自身後年次のような感想を述べた。

正宗白鳥氏の「死者生者」である。これは僕の「芋粥」と同じ月に発表された為、特に深い印象を残した。「芋粥」は「死者

生者」ほど完成してゐない。唯幾分か新しかつただけである。が、「死者生者」は不評判だつた。「芋粥」は一「芋粥」の不評判だつたのは吹聴せずとも善い。「讀后感」でも云ふのかな、さう云ふものの深い短篇だね。」—僕は當時久米正雄君の「死者生者」を讀んだ後、かう言つたことを覚えてゐる。」(「續文藝的な、餘りに文藝的な」一)

最晩年の芥川龍之介のこの感想について、『芋粥』の不評判だつたのは吹聴せずとも善い。」という感想は、謙辞であると同時に強い自負の表現である。今日、「芋粥」と「死者生者」を引き比べて作品評価はどうであろうか、「新小説」と「中央公論」とでは、同じ商業雑誌であっても格が違うという事は言える。さらに言える事は、「死者生者」が庶民の利己的な内面葛藤、従来之余りに自然主義的作風であつた事、作者の虚無的な人生観の反映であつた事は事実である。「芋粥」が、忘れられた典籍「今昔物語集」を典拠としながら、その近代的解釈により、その技巧的表現により新局面を開いた事は確実である。

九月号には谷崎潤一郎の「亡友」、徳田秋声の「穴」、長田幹彦の「霜月の頃」、田山花袋の「出水」、及び龍之介の「芋粥」の順で載せられたのであるが、その中では「芋粥」を以て最も優秀な作と、龍之介も久米正雄も感じたようである。(「芥川龍之介I」十一)

この吉田精一の見解の根拠は、続いて引用されている当時上総の一宮海岸で芥川龍之介と同宿していた久米正雄から漱石宛発送された書簡である。

「只田山さんが可成り充実した、手固い、淡彩の山水画を見るやうな味に、勁敵を見出したと云へるでさう(中略)期待してゐた谷崎さんのは少し落胆しました。幹彦君のに至つては申すも野暮ですけれども、よくもあゝ破廉恥な材料を、無反省で書けたものだと思ひます。」

以下、「芋粥」(「新小説」)と同時掲載になつ

た諸家の作品群の中で芥川龍之介の作品がどのように当時の読者に読まれたか考察して見たい。長野誉一「芥川龍之介と古典」（「勉強出版」第四章）には、「芋粥」（「新小説」）を筆頭に同時掲載の諸作家の作品の短評が記述されている。

長田幹彦「霜月の頃」は自身の放浪生活の体験の反映で、旅芸人にまつわる恋愛譚で後年、川端康成「伊豆の踊子」に影響を与えた。長田幹彦は近松秋江共に、芥川龍之介の先輩赤木桁平、「遊蕩文学の撲滅」（「讀賣新聞」大正五年八月）で槍玉に挙げられた事で有名になったが、芥川龍之介自身後年次のような見解を示した。

其他長田幹彦氏の如き、この主義に属すべき作家もあるが、氏の創作が所謂通俗小説の領域に存する以上、且又その通俗小説が花袋氏などの長篇より更に非芸術的である以上、此处には多くを語るべき必要を見出さない。（「大正八年度の文芸界」三）

田山花袋「出水」は、久米正雄の賞賛にも関わらず長野誉一に次のような説明がある。

「『出水』は花袋自身と目せられる主人公が愛人と旅行の途次、川止めの洪水に遭う話、花袋の佳作といわれているが、やはり感傷と甘さがつまとう。」（「芥川龍之介と古典」第四章）、先に述べた如くに、自然主義文学全盛の時期にこれを打破する意味での白樺派の文学があるわけで、自然主義文学の退潮期に「芋粥」を世に問う事になった芥川龍之介にとって、田山花袋「出水」は、何ら文学的脅威ではなかった筈である。

徳田秋声「穴」は、「作者の分身と見られる男が故郷を訪れての感慨で、小説というよりも随筆。」（「芥川龍之介と古典」第四章）と紹介されている。徳田秋声は田山花袋共に、芥川龍之介にとっては二十歳年上の作家であり、当時文壇的には中堅に位置しており直接的には脅威ではなかった筈である。時期的にも自然主義文学は、一般読者に飽きられていた頃である。

谷崎潤一郎「亡友」は、「大貫晶川かと思

われる亡友の短い生涯を叙したもので、『芋粥』を除いてはこれと『出水』とが一番見応えがある。」（「芥川龍之介と古典」第四章）、この谷崎潤一郎の作品は、新規軸の展開を示したものではないが、一歳年下の「新思潮」同人の青春の思い出を記録して出色である。大貫晶川が、ツゲーネフの翻訳に熱中した事や島崎藤村に私淑した事など貴重な記録である。近年、川端康成「伊豆の踊子」に影響を与えたとして指摘された大貫晶川「伊豆相模」（第二次「新思潮」）は、今日読んでみると島崎藤村の圧倒的な影響下に執筆されたものである事が判明する。

「芋粥」（「新小説」）で文壇進出を果たした芥川龍之介にとって、「新小説」に作品を掲載したこの時の四人は、先輩作家として特別の存在であった筈だ。谷崎潤一郎とは、後年までその才能を競い合った事は周知の事実である。徳田秋声には、最晩年「近代日本文藝読本」（「興文社」大正十四年）の件で抗議を受けている。田山花袋については、「大正八年度の文芸界」等而言及する事はあっても、その筆致は概ね冷淡である。長田幹彦については、晩年まで侮蔑の念を隠さなかった。

芥川龍之介自ら公言するように「芋粥」は、種々の幸運な事情で彼を中央文壇に導いた記念すべき作品である。余りに安易に文壇の階段を華やかに登り始めた事が、最晩年の彼に災いをもたらした事は、別の課題である。生涯、芥川龍之介に敵対した早稲田派の代表的批評家田中純「秀才芥川龍之介」（「作家の横顔」昭和三十年七月）には、「芋粥」による安易な文壇進出が、彼の人生に災いしたと露骨に感想を述べている。

III 「杜子春」

はしがき

「杜子春」（「赤い鳥」大正九年七月）には、後年作者自身に自作自注とも言うべき書簡が残されている。内容から相手は、未知の義務教育課程の教師ではあるまいか。

「あの詩は唐の蒲州永樂縣の人、呂巖、字

は洞賓と申す仙人の作に有之候、年少の生徒には字義などを御説明に及ばざる乎。なほ又拙作「杜子春」は唐の小説杜子春傳の主人公を用ひをり候へども、話は2/3以上創作に有之候。なほなほ又あの中の鐵冠子と申すのは三國時代の左玄と申す仙人の道號に有之候。三國時代には候へども、何しろ長生不死の仙人故、唐代に出没致すも差支へなかるべく候。呂洞賓や左玄の事はいろいろの本に有之候へども、現代の本にては東海林辰三郎氏著の支那仙人列傳を御らんになればよろしく候。」(「河西信三宛書簡」昭和二年二月三日)

後年の作者自身による自註については、これから作品構造を分析していく事で考えていく。吉田精一は、「有名な中国の傳奇、鄭還古撰の『杜子春傳』を骨子とし、それに彼の想像を交えて創作化したもので(「芥川龍之介I」十九)と述べているが別のところで、「鄭還古撰『杜子春傳』最後だけを少しかえている。」(「芥川龍之介案内」岩波書店)とも言っている。水谷昭夫は、「槍ヶ嶽」の登山は、『杜子春』に多く援用されていることは疑えない。」(「芥川龍之介の世界」清水弘文堂書房)と述べて、「槍ヶ岳紀行」の本文を三箇所ほど引用して「杜子春」(「峨眉山」)の場面設定に同時期執筆の「槍ヶ岳紀行」が多く連想的に影響を与えたという説明を付け加えた。しかし「杜子春」(三)に峨眉山の具体的な険阻な描写は作品内部に何一つ採りいれられていない。「杜子春」(三)の峨眉山という地名に引きつけられて同時期執筆の「槍ヶ岳紀行」の険阻な描写が、そのまま「杜子春」(三)に撰取されたと思ひ込んだに過ぎない。

以前、私は『河童』成立考」という論考で「槍ヶ岳に登った記」(生前未刊行)の草稿を整理、再構成から「槍ヶ岳紀行」が成立した事、さらにこの二作品創作行為から「河童」冒頭の穂高山への主人公の単独登山の描写がなされた事を証明した。つまり、芥川龍之介の北アルプス登攀は三度創作作品内部で成し遂げられたが、事實は明治四十二年八月

八日に行われた槍ヶ岳登攀が生涯一度のそれである事を証明した。

「杜子春」は「秋山図」と同じく半年後の控えた中国視察旅行の準備としての創作行為の一環であったであろう。周知のように「杜子春」の典拠は、国訳漢文大成「晋唐小説」所収「杜子春傳」である。典拠「杜子春傳」から「杜子春」が、創作されるに至る過程で芥川龍之介の個性がいかに発揮されたか考察を進めていく。

「たとひどんなことが起らうとも、決して声を出すのではないぞ。」(「杜子春」四)

「もしお前が黙つてゐたら、おれは即座にお前の命を絶つてしまはうと思つてゐたのだ。」(「杜子春」六)

広く指摘されているように芥川龍之介の童話には、自家撞着とも言うべき構想上の矛盾が多く見られる。「蜘蛛の糸」では、再挑戦の機会を与えた御釈迦様は、地獄で苦しむ罪人に対して実現不可能な要求をしている。「杜子春」においては、この辺の事情はどうか。

以下、典拠「杜子春傳」を参考にして芥川龍之介が「杜子春」を如何に創作したか考えていく。

1 (「第一章」)

典拠「杜子春傳」と「杜子春」との比較研究は、すでに先学の研究がある。山敷和男「『杜子春』論考」、渡部芳紀「杜子春」等の典拠との比較研究を参考にさせて頂きながら芥川龍之介の創作行為の細部について考察を進めたい。

或春の日暮です。(中略)若者は名を杜子春といつて、元は金持の息子でしたが、今は財産を費ひ尽して、その日暮しにも困る位、憐な身分になつてゐるのです。(「杜子春」一)

(杜子春は周隋間の人なり。少くして落魄し、家産を事とせず。志気間縦にして、酒を嗜み邪遊するを以て、資産蕩尽し、親故に投ぜしも、皆事を事とせざるの故を以

て棄てらる。「杜子春傳」)

冒頭部分を比較しただけで両作品の違いが、明瞭である。「杜子春傳」は、即物的な記録文学に類する作品である。従って、杜子春の置かれた状況、舞台や作品背景が必然性をもって記述されている。放蕩無頼の生活により財産を散じて、勤務の意欲に欠けていて現状に至ったと説明している。これに反して「杜子春」は、文学的幻想の世界に導入させる為の作者による技巧が成されている。

或春の日暮です。(中略)空には、もう細い月が、うらうらと靡いた霞の中に、まるで爪の痕かと思ふ程、かすかに白く浮んでゐるのです。(「杜子春」一)

(冬に方衣破れ腹空しく、長安中を徒行す。「杜子春傳」)

事実関係だけを即物的に記述している「杜子春傳」に比して、芥川龍之介が文学的色彩を施して童話作品として作品完成を帰している事が理解できる。舞台を唐の都長安から後期の都洛陽に変えている事、季節を峻烈な冬から春の朧月の季節にしている事、全ては作品を童話として位置づけるための作者の技巧である。路頭に迷い、緊迫した状況に追い込まれた主人公は、「杜子春」では幻想的な春の色彩の中で一人の老人に会うのである。

門一ぱいに当たてゐる、油のやうな夕日の光の中に、老人のかぶつた紗の帽子や、土耳其の女の金の耳環や、白馬に飾つた色糸の手綱が、絶えず流れて行く容子は、まるで画のやうな美しさです。しかし杜子春は相変わらず、門の壁に身を凭せて、ぼんやり空ばかり眺めてゐました。(「杜子春」一)

(彷徨して往く所を知らず。東市の西門に於て飢寒の色掬すべし。天を仰ぎ長吁す。「杜子春傳」)

唐の都長安、寒風の中での絶対絶命の飢餓線上の危機感は、芥川龍之介により幻想的な世界に変貌させられている事が判明する。こうした状況下で仙人と邂逅する設定である。

するとどこからやつて来たか、突然彼の

前へ足を止めた、片目眇の老人があります。(「杜子春」一)

(一老人杖を道に策くあり、「杜子春傳」)

「杜子春」ではこの老人が、道教の仙人であるという設定である。先に引用の芥川龍之介書簡では、「鐵冠子と申すのは三國時代の左玄と申す仙人の道號に有之候。」とある。しかし典拠「杜子春傳」では、この老人が当時唐の社会に浸透していた拜火教(ゾロアスター教)の関係者であるという設定になっているようだ。

今この夕日の中に立つて、お前の影が地に映つたら、その頭に当る所を夜中に掘つて見るが好い。(「杜子春」二)

(明日午時子を西市の波斯邸に俟たん。慎んで期に後るるなかれ。「杜子春傳」)

典拠「杜子春傳」に記載された細部は、芥川龍之介により「土耳其の女の金の耳環や、」という洛陽の風景描写の中にさり気なく取り入れられているようだ。漢籍記録「杜子春傳」から童話「杜子春」を創作する過程には、無意識に日本人としての芥川龍之介の抒情性が、影響しているようだ。

こんな思ひをして生きてゐる位なら、一そ川へでも身を投げて、死んでしまつた方がましかも知れない。(「杜子春」二)

(子春其心を言ひ、且つその親戚の疎薄を憤る。感激の氣顔色に發す。「杜子春傳」) 生きる術を失い路頭に迷つた時、「杜子春傳」では怒りと憤怒は他者に向かい、なかならずく憎しみは身近な親族に対して向けられる。日本人の感性を持った「杜子春」は、マイナス思考で責任を自分に帰して消えてしまいたいと言うのである。作中人物のこうした無意識の操作に芥川龍之介の日本的感性が、露見している。

「杜子春」は仙人から三度金を恵まれるが、その方法は最初は、杜子春の影の部分、頭に当る箇所を掘る事を勧められる。二度目は、胸のところを三度目は、腹の部分掘る事を勧められる。一度、二度、三度と金を仙人から恵まれる筋書きは、「杜子春傳」で三度に

巨り仙人と杜子春とが、譲与の金銭の額をやり取りする場面から借用しているかも知れない。

今この夕日の中に立つて、お前の影が地に映つたら、その頭に当る所を夜中に掘つて見るが好い。きつと車に一ばいの黄金が埋まつてゐる筈だから。(「杜子春」二)

(時に及び子春往く。老人果して錢三百萬を興へ、姓名を告げずして去る。「杜子春傳」)

「杜子春傳」では、直接老人が金銭を杜子春に渡している。高額の金銭を直接相手に渡す方法を芥川龍之介は、踏襲せずに極めてロマンチックの方法で「杜子春」は、巨万の富を得る事になる。この事は、先に記述した通りである。この辺に作者の日本的な感性を見る事は誤りではないであろう。小島政二郎「眼中の人」は、宴席の祝儀の額をめぐって芥川龍之介が、その洗練された生き方を示した事に対して生活第一主義の菊池寛が反発する場面を生き生きと活写している。金銭を渡す場面も両作品は、際立った違いがある。

老人は暫く何事か考へてゐるやうでしたが、やがて、往来にさしてゐる夕日の光を指さしながら、(「杜子春」一)

(老人曰く幾緡ならば即ち用に豊と。

「杜子春傳」)

「杜子春」では、金銭を相手に譲与する前に老人は、優雅なためらいを示すのである。

2 (「第二章」)

「杜子春」(第一章、第二章)は、典拠「杜子春傳」を離れる事はあまり無くて、原典をなぞっている。しかし、すでに述べた如くに「杜子春」には、唐の都洛陽の脆い華やかさ、華麗な美しさが盛りこもれている。こうした作品内部の装飾的部分に芥川龍之介の主観的な意思の反映があるであろう。

「杜子春傳」では、最初「錢三百萬」を得、二度目には「錢一千万」を得、三度目には「錢三千万」を得る。そして二度目の「錢一

千万」を得る直前の決心は、極めて近代的な心情の告白であり、「杜子春」の主人公造型に影響を与えているであろう。

錢一千万を得たり。未だ受けざるの初、憤を發して以為らく此より生を謀らば、(中略) 錢既に手に入れば心又翻然として縦に之が情に適し、又却つて故の如く、(「杜子春傳」)

「錢一千万」を得る以前の健気な心構えと一瞬に失われる健気な心構えの格好の好対照は、「杜子春」に採用される事は無かったが芥川龍之介自身は、「杜子春」創作行為において十分なる認識を持っていた筈である。「杜子春」(「第二章」)で際立っている典拠離れは、都洛陽の華やかさを彩る作者の意識的な華麗な描写である。これは最終的には、「おれは泰山の南の麓に一軒の家を持つてゐる。その家を畑ごとお前にやるから、早速行つて住まふが好い。」(「第六章」)という最終的な簡素な生活を際立たせる為の創作手法である。

蘭陵の酒を買はせるやら、桂州の龍眼肉をとりよせるやら、日に四度色の変る牡丹を庭に植ゑさせるやら、白孔雀を何羽も放し飼ひにするやら、(「杜子春」二)

いくつかの漢籍を探索した結果の断片的知識は、数ヵ月後に控えた半年間に亘る中国視察旅行の為の芥川龍之介の用意周到の準備を伺わせている。「蘭陵の酒」(「華東区江蘇省武進県にある蘭陵で産する美酒。李白の詩「客中行」などにも見え、古来有名。」筑摩全集類聚、脚注)などという固有の名酒の名は、「蘭陵の美酒 鬱金香」(「客中行」)の詩句から連想されたものであったろうし、唐代においては高価な贅沢品であった牡丹を配する気配り等、創作上の工夫である。

「杜子春」は、三度目の老人からの資金提供を断る。「いや、お金はもう入らないのです。」(「第三章」)、ここら辺りから芥川龍之介「杜子春」は、典拠離れが著しくなるのである。「杜子春傳」では、三度目の資金「三千万」を受け取ると喜びのあま

りに次のような発言をなすのである。

吾此を得、人間の事以て立つべし、孤孀以て衣食を足すべし、名教に於て復た圓ならん、叟の深恵に感ず、事を立つるの後、唯叟の使ふ所のままにせんと。(中略)中元我を老君の雙楡の下に見んと。(「杜子春傳」)

「中元我を老君の雙楡の下に見んと。」(「陰曆七月十五日、老子の廟に訪ねて来てください。)」とあるように「杜子春傳」は、儒教や道教の教訓的な色彩のある話に変貌していくが、「杜子春」はこうした宗教的側面が切り捨てられている。芥川龍之介「杜子春」(「第一章」「第二章」)は、ほぼ典拠「杜子春傳」を筋書きとしては、なぞっていると見える。

3 (「第三章」)

「杜子春」(「第三章」)から芥川龍之介の創作意識は、典拠「杜子春傳」を逸脱して行く。再度零落した「杜子春」は、老人からの三度目の資金提供の申し出を断る。「いや、お金はもう入らないのです。」(「杜子春」三)、そして人情の希薄を嘆き、仙人になりたい希望を述べる。「人間といふものに愛想がつきたのです。」(「杜子春」三)

「杜子春傳」においては、三度目に「三千万」の資金を老人から得た後、喜びの余り奉仕活動を実践し、老人と行動を共にする。「三千万」の資金を得る時には、さすがに慙愧の念でためらいを見せている。「子春其愧に勝へず。面を掩うて走る。」(「杜子春傳」)、これに対する老人の態度、言動も極めて合理的なそれであって、「老人裾を牽きて之を止めて曰く、嗟乎拙謀なりと。」(「ああ、なんとやり練りの下手な人だ」)

「杜子春」は、仙人を志願するにしても心理的な屈折を経て、止も得ずその道を選ぶのである。「(前文略)ではこれからは貧乏をしても、安らかに暮して行くつもりか。」(「杜子春」三)という仙人の問いかけに対して、「何になつても、人間らしい、正直な暮らしをするつもりです。」(「杜子春」六)とい

う理想的な返答をするためには、紆余曲折が必要なのである。

「人間は皆薄情です。(中略)たとひもう一度大金持になった所が、何にもならないやうな気がするのです。」(「杜子春」三)

こうした人間界に対する失望、出家遁走の意味合いの強い仙人志願である。この辺の脚色にも作者の日本的な、抒情的な側面が色濃く反映しているであろう。典拠では、「親戚豪族も相顧る者なし、獨り此叟三たび我に給す。我何を以て之に當らんと。」(「杜子春傳」)、つまり三度の資金提供の恩義に報いるための義侠心からの、道義的な連帯感からの仙人志願である。

鉄冠子はそこにあつた青竹を一本拾ひ上げると、(中略)晴れ渡つた春の夕空を峨眉の方角へ飛んで行きました。(「杜子春」三)

箒に乗って空を飛行する西洋の魔女のような行動を三国時代の仙人、鉄冠子に無意識に取らせるのは作者の寓意かも知れない。峨眉山に向かって飛行する三国時代の仙人、左玄(道號「鉄冠子」)が唱和するのは、作者が自註する如くに唐の仙人、呂洞賓の漢詩であろう。仙術で中国全土を眼下に見下ろしながらの、眺望を詠んだ漢詩を選択するには、作者の創作行為に対する工夫があろう。

「杜子春傳」では、「老人方に二楡の陰に嘯く。遂に與に峯山雲臺峰に登り、入ること四十里餘、一居處を見る。」とあり、中国全土を飛行して峨眉山に至る行程の記述などは無い。仙術の修行の場を峨眉山に設定するにおいては、作者の何らかの恣意的思考がなければならぬ。李白「峨眉山月 半輪の月」(「峨眉山月の歌」)の七言絶句が異郷の地の記憶として作者の脳裏を横切ったかも知れない。

4 (「第四章」)

(「はしがき」)で問題視した、峻烈な「槍ヶ岳紀行」の険阻な山岳描写が、峨眉山の記述に関係しているという箇所は、以下の引用

である。

そこは深い谷に臨んだ、幅の広い一枚岩の上でしたが、よくよく高い所だと見えて、中空に垂れた北斗の星が、茶碗程の大きさに光つてみました。(中略) やつと耳にはひるものは、後の絶壁に生えてゐる、曲りくねつた一株の松が、こうこうと夜風に鳴る音だけです。」(「杜子春」四)

この峨眉山の描写は、機械的陳腐な風景描写で「槍ヶ岳に登つた記」の実録記録から敷衍した「槍ヶ岳紀行」の写実には、及ばない。この第四章は、仙人になる為の峨眉山での具体的な修行の内容である。虎と大蛇の来襲、さらに雷雨の中で神将により刺し殺されても「杜子春」は、鉄冠子との約束を守り通す。

たとひどんなことが起らうとも、決して声を出すのではないぞ。(「杜子春」四)

(戒めて曰く、慎んで語る勿れ、尊神・悪鬼・夜叉・猛獣・地獄及び君の親属、囚縛するて萬苦所となりすと雖も、皆真実にあらず。ただ當に動かず語らざるべし、宜しく心を安んじて懼るるなかるべし、終に苦む所なからん。當に一心に吾が言ふ所を念ずべしと。「杜子春傳」)

「杜子春」は、典拠「杜子春傳」の細部を相当に諸略しているが、肝心な譚の要の箇所は典拠を踏襲しているようだ。「決して声を出すのではないぞ」(「慎んで語る勿れ」)。作者は、「杜子春傳」にある杜子春の妻が、面前で切り刻まれる残酷な場面を省略した。当然、童話文学としての「杜子春」の読者を意識しての創作上の技巧と思われる。

虎と蛇とは霧の如く、夜風と共に消え失せて、後には唯、絶壁の松が、さつきの通りこうこうと枝を鳴らしてゐるばかりなのです。(「杜子春」四)

(子春神色動かず。頃ありて散ず。「杜子春傳」)

「杜子春」のこの辺の描写、典拠「杜子春傳」を逸脱している場面は、「雨月物語」(「白峯」)の西行の面前から、崇徳院の亡霊が立ち消える場面を彷彿させる。「十日あまりの月は峯

にかくれて、木のくれやみのあやなきに、夢路にやすらふが如し。ほどなくいなめの明ゆく空に、朝鳥の音おもしろく鳴わたれば。」(「白峯」)

神将はかう喚くが早いか、三叉の戟を閃かせて、一突きに杜子春を突き殺しました。(「杜子春」四)

(左右に勅して之を斬り、切り訖れば、魂魄領せられて、閻羅王を見る。「杜子春傳」)

神将に突き殺された杜子春は、峨眉山の一枚の岩の上に死体となって横たわり、魂は肉体を離脱して地獄に堕ちて、やがて地獄の閻魔大王の責め苦を受ける「杜子春」(五)に引き継がれる事になる。「杜子春」は、典拠「杜子春傳」を逸脱しても、完全なる典拠離れを成し得た作品でない事が判明する。「芥川はジャンルとしての一つの型を意識せずには、作品の質を上げるのできなかつた作家である。」(「トロツコ」という三島由紀夫の評価が思い出される。

5 (「第五章」)

「杜子春」(「第五章」)も基本的には、典拠「杜子春傳」の筋書きを踏襲している。地獄に堕ちた杜子春は、閻魔大王の前で様々な責め苦を受けるもそれに屈す事なく無言のままである。しかし、畜生道に落ちた亡き両親、とりわけ母親のわが子杜子春を思う言葉に思わず鉄冠子との約束を破ってしまう。

「心配をおしでない。私たちはどうなつても、お前さへ仕合せになれるなら、それより結構なことはないのだからね。大王が何と仰つても、言ひたくないことは黙つて御出で。」(「杜子春」五)

「杜子春」に作品主題を見出そうとすれば、これが第一の主題になろう。あらゆる種類の責め苦に耐えた杜子春に鉄冠子との約束を破らせ、「お母さん。」(「杜子春」五)と叫ばせたのは、杜子春を思う上記の母の子を思う愛情である。「杜子春」が、童話文学であるという事情を考慮して作者は、この間の事情を

考慮して以下引用の言わずもがなの説明を付け加えた。

大金持になれば御世辞を言ひ、貧乏人になれば口も利かない世間の人たちに比べると、何といふ有難い志でせう。何といふ健全な決心でせう。(「杜子春」五)

以上の「杜子春」の第一の主題は、芥川龍之介の母の不在を感じさせる。「杜子春」(五)は、筋書きは典拠「杜子春傳」を踏襲しながらも、典拠の持つ残酷な怪奇な箇所は取捨して芥川龍之介の文学的感性の優れている事を感じさせる。中国文学特有の残酷な、非人間的側面は切り捨て、日本人的感性で再構成されているが、少年の好奇心をそその程度の残酷さは残されている。この辺にも芥川龍之介の典拠に拠りながらも、典拠に引きずられる事のない文学的手腕がある。

「杜子春」は鉄冠子との約束を肉親の情に絆されて裏切る事になるが、この基本的な構図は、典拠「杜子春傳」を踏襲している。「杜子春傳」では、女に生まれ変わった杜子春が、結婚して儲けた男の子が、母親である杜子春の無言に腹を立てた夫により虐待を受ける惨状に思わず声を上げる事になっている。

(乃ち両足を持し、頭を以て石上に撲つ。手に応じて砕け、血濺ぐこと数歩なり。子春愛心に生じ、忽ち其約を忘れ、覚えず聲を失して云く、噫噫と。聲未だ息まざるに、身故處に座す。「杜子春傳」)

典拠「杜子春傳」の引用箇所から類推する事が可能なように、「杜子春」(五)から「杜子春」(六)への場面の急展開は、作者の手柄というより多く典拠の簡潔な描写力に負っている事が判明する。

その声に気がついて見ると、杜子春はやはり夕日を浴びて、洛陽の西の門の下に、ぼんやり佇んでゐるのでした。(「杜子春」六)

「子春愛心に生じ」「噫噫と」「身故處に座す」(「杜子春傳」)の直截な文体が、「杜子春」(五、六)の場面の急展開に与って

いる。

6 (「第六章」)

「杜子春」(六)の以下の引用の一文が、児童文学作品「杜子春」の第二の主題である事は明白である。教養主義の一面を担う児童文学という側面を考えれば、こうした簡素な生活に理想を求める姿に平均的日本人たる芥川龍之介の良好な素質を見出せる事だろう。

おれは泰山の南の麓に一軒の家を持つてゐる。その家を畑ごとお前にやるから、早速行つて住まふが好い。今頃は丁度家のまはりに、桃の花が一面に咲いてゐるだらう。(「杜子春」六)

「杜子春」において作者の主観が、最も色濃く反映して前面に出ているのはこの箇所であろう。極彩色に彩られた「杜子春傳」には該当の場面は、存在しない。「杜子春」の最終局面は、簡素、質素、素朴な生活に理想的人生を夢見る典型的な日本的感性の世界に落ち着いている。

「杜子春」が、夢見た生活が付け焼刃でなかった事は、作者自身生活の打開の為に何でも簡素な桃源郷の生活を実生活で求めた事で知られる。横須賀の海軍機関学校勤務時代、結婚生活の最初の一年を芥川龍之介は、夫と一年間鎌倉大町の離れに下宿した。「杜子春」(六)の理想的な生活には、この時の生活経験の反映があろう。「鎌倉を引きあげたのは一生の誤りであった」(「追想芥川龍之介」)というのが、芥川夫人が遺した龍之介の生の声であった。

「杜子春」(六)は、「杜子春傳」からの最も典拠離れの甚だしい箇所でもある。「杜子春傳」では、杜子春は道士に導かれて華山の雲台峰に登り、深山深く分け入ったところにある一軒家で仙人のための秘薬を作る作業に従事するのである。幻覚を覚える薬を服用して試練に耐える事を強いられるが、「もの言つてはならないぞ」という道士との約束を幻覚の中で守り続けるが、わが子との愛のために「あっ」という声を上げて最終的に約束

を破る。華山の雲台峰の山中で覚醒した杜子春に道士は、仙人に成り難き事を説教する。期日を経て雲台峰に分け入ったが再度道士に会うことは、叶わなかったという話である。

「杜子春傳」の譚としての構造は、「遂に與に華山雲台峰に登り、入ること四十里餘、一居處を見る。室屋巖潔、常人の居にあらず。」（「杜子春を連れて、華山の雲台峰に登って行ったが、四十里も分け入ったところに一軒の家があった。清潔で普通の人の住居ではなかった。」）で始まり、過日杜子春が再会を期して訪ねたが叶わなかったという話である。「子春既に帰り、其の誓を忘れしを愧ぢ、復た自ら効して以て其過を謝し、行きて雲台峰に至るに、絶えて人跡なし。歎恨して帰る。」（「杜子春は、帰宅した後も道士との約束を果たせなかった事を恥じて、再挑戦してみようかという思いで再訪したが、希望は叶わなかった。」）

典拠「杜子春傳」の譚としての構造を把握してみると、芥川龍之介「杜子春」の特徴が、際立って見えてくる。「杜子春傳」は、陶淵明「桃花源記」を思わせる譚であるが、「杜子春」には、作者の近代的な知性の閃きが見られる。さらに、少年少女向けの芥川龍之介のサービス精神も見られる。

青竹に乗って二人が、峨眉山に向かって飛行する典拠離れの場面、最終的には簡素、素朴な生活に満足する最終局面に作者の少年を意識した実作者としての側面が見られる。先に述べた如くに、「杜子春」には、二年前創作の「蜘蛛の糸」と同じ自家撞着が見られる。鉄冠子は、西王母^{せいおうぼ}を訪問している間（「私が不在の時に」）、いかなる試練であろうと「決して声を出すのではないぞ。」（「杜子春」四）と約束しておきながら、「もしお前が黙つてゐたら、おれは即座にお前の命を絶つてしまはうと思つてゐたのだ。」（「杜子春」六）は、明らかに作品構造上の矛盾である。教訓的に言えば、青少年に向かって約束は、破って良いと教えている事になる。しかし、ここは芥川龍之介の立場に立って、理不尽な約束は破

棄してよし、或いは世間の約束などより母を大切にしろという教訓的文藝作品として理解したい。

むすび

「杜子春」は、「秋山図」（「改造」大正十年一月）「奇遇」（「中央公論」大正十年四月）等の作品と同じく半年間の中国視察旅行の準備の為に、漢籍を探索する作業の中から生み出された作品である。伊東貴之「『杜子春』は何処から来たか？」には、「杜子春傳」の譚に拝火教（「ゾロアスター教」）の影響があると指摘している。「杜子春傳」には、次のような一文がある。「明日午時子を西市の、波斯邸に俟たん。」（「明日の正午西市にあるペルシヤ人の大邸宅で待つ」）、典拠のこの箇所は作品には取り入れられなかったが、芥川龍之介には「杜子春」創作時に典拠の内部に混入している異教の存在についての認識があった筈だ。「土耳其の女の金の耳環」（「杜子春」一）という語句がその片鱗を示している。

前記「『杜子春』は何処から来たか？」には、典拠「杜子春傳」の書誌学的調査が、掲載されている。「杜子春」と「杜子春傳」との比較検討により、芥川龍之介が「杜子春」の典拠として拠り所としたのは「杜子春傳」に間違いない。「杜子春傳」は、国訳漢文大成「晋唐小説」（「杜子春傳」）と「太平廣記」（「卷第十六神仙十六」）のそれとは、字句の異同があるようである。

「杜子春傳」は六朝時代の譚のようであるが、唐の時代隆盛を極めた拝火教がすでに早くに浸透していたようだ。松本清張「火の路」（「文藝春秋」昭和五十五年十一月、十二月）は、飛鳥の謎の石造遺物を「齋明記」に浸透した拝火教（「ゾロアスター教」）の痕跡と見る古代史に素材を得た推理小説である。伊東義教「ペルシア文化渡来考」、岩村忍「暗殺者教団」等から示唆を受けた松本清張「ペルセポリスから飛鳥へ」（「日本放送出版協会」）は、自説を補強している。